4 サイクルで進める組織的な「学業指導」

（令和4（2022）年3月　栃木県教育委員会）

サイクルで進める組織的な「学業指導」

日々の「学びに向かう集団づくり」と「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」の取組をより効果的な指導・援助にしていくためには、学年や学校全体で「組織的に進める」ことが有効です。

「組織的に進める」ためには、教職員が、学年目標や学校教育目標、児童生徒一人一人がそれぞれの発達段階において達成することが期待される「発達課題」（※）等、児童生徒に期待する姿を共有するとともに、児童生徒の実態を踏まえ、「学びに向かう集団づくり」と「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」の取組を通じて身に付けさせたい資質・能力を明確にすることが必要です。そして、それらを踏まえて取組の具体的な内容や年間計画等を検討し、「PDCAサイクル」で取組を実施します。

※　発達課題
　子どもが健全な発達を遂げるために、乳幼児期から青年期までの連続的な子どもの発達の過程において、それぞれの発達段階において身に付けておく必要がある資質や能力

～「組織的に進める」ためのポイント ～

① 児童生徒に期待する姿を共有する。

② 「集団づくり」と「授業づくり」の取組を通じて身に付けさせたい資質・能力、態度を明確にする。

③ ①②を踏まえて取組の具体的な内容や年間計画等を検討する。

④ PDCAサイクルで取組を実施する。

「PDCAサイクル」においては、児童生徒に期待する姿の実現や達成に向けて、児童生徒に対する意識調査等を通じて、一人の教職員ではなく、学年や学校全体で定期的に児童生徒の実態や変容を共有し、その実態や変容に即した取組を意図的・計画的に進め、取組の点検・見直し、そして、改善を図っていきます。

「PDCAサイクル」という言葉を聞くと、難しさや負担を感じるかもしれません。しかし、教職員にとって「PDCAサイクル」は身近なものです。例えば、授業後に職員室に戻る途中で、授業中の児童生徒の様子を振り返り、それを踏まえて、指導方法や配布物等を工夫し、次回の授業では改善を図った授業を展開するということがあると思います。この例で言えば、教職員は、教科等のねらいを達成するために授業での指導計画を立て（P：計画）、授業を展開し（D：実行）、児童生徒の様子を振り返って指導方法等を見直し（C：点検）、指導方法等を修正して次の授業を展開しています（A：修正）。このように、教職員は日々「PDCAサイクル」で取組を進めているのです。

～ 学業指導の「PDCAサイクル」 ～

P（計画）
意識調査等を通じた児童生徒の実態の把握、課題や目標の設定、取組の準備

D（実行）
「集団づくり」と「授業づくり」の取組の実施

C（点検）
意識調査等の結果の分析（実態や変容の共有）、取組の点検・見直し

A/P（修正/計画）
目標や取組の修正、取組の方向性の共有

D（実行）
「集団づくり」と「授業づくり」の取組の実施

県教育委員会では、令和4（2022）年3月に教師用指導資料「サイクルで進める組織的な取組～子どもたち一人一人が大切にされ、安心して学ぶことができる集団づくりと授業づくりのために～」及びその解説資料を作成しました。この資料では、年間3回、「PDCAサイクル」で取組を進める事例を紹介しています。125ページから135ページに掲載していますので参考にしてください。

また、県教育委員会では、令和5年度及び令和6年度に、県内公立学校を対象として、大学教員等で構成する「学業指導応援チーム」を学校に派遣し、「PDCAサイクル」で進める組織的な取組の実践について指導助言を行う「学業指導応援チーム派遣事業」を実施しました。対象となった学校の取組については、76ページから124ページに掲載していますので参考にしてください。

1

令和5年度「学業指導応援チーム派遣事業」の実施校における取組
宇都宮市立横川中央小学校　第2学年

課題を明確にして具体策を検討した取組と、児童の「よさを伸ばすこと」に焦点を当てた取組

1　取組の概要

「授業がよくわかる」や「授業に進んで取り組んでいる」の項目に課題があると捉えて、「聞いて理解するための視覚的な工夫」に取り組んできたが、発達の段階や児童の実態から、「よさを伸ばす」ことも取り入れることとし、生活科の単元において「なかよしまつり」に向けて児童が主体的に取り組む活動を実施した。

（1）児童の現状等

○ 授業に対して前向きな態度で臨んでいるが、グループなどの話合いに自分から進んで参加できていない現状がある。
○ 表面上は話をよく聞いているが、実際にはきちんと理解していないことが多い。
○ 落ち着かない児童や衝動的な言動をする児童がおり、友達とのトラブルに発展することがある。

（2）期待する児童の姿

○ 聞いて理解する姿
○ 授業に進んで取り組んでいる姿

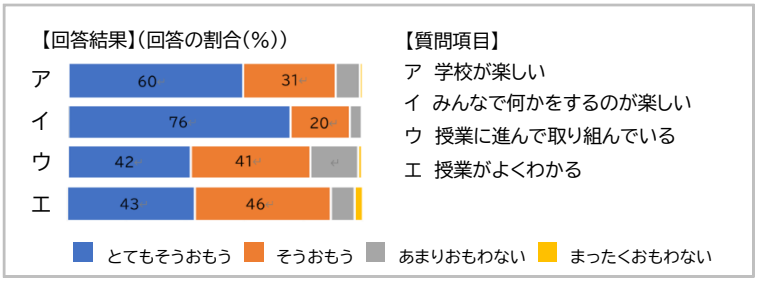
（3）主な取組

○ 聞いて理解するための視覚的な工夫
○ 児童の主体的な活動（なかよしまつり）を取り入れる

2　PDCA サイクルで進めた取組

PDCA サイクル
P ＞ D ＞ C ＞ A/P ＞ D ＞ C ＞ A/P ＞ D ＞ C ＞ A/P ＞ D

P（計画）５月　児童の意識を把握（アンケート調査の実施）



2学年の先生方は、KJ法を使って2学年の児童のよさや課題点を明らかにしながら目指す姿を設定したり、それに向けた具体的な取組内容を検討したりした。

■ アンケート調査の結果を基に、学年会で児童の状況及び今後の取組等について話し合った。

○「ウ　授業に進んで取り組んでいる」、「エ　授業がよくわかる」 の「とてもそうおもう」の割合が低い。たしかに授業内容を理解できていない児童や自分の意見を表出できない児童がいる。
○ 一斉指導での指示が理解できない児童が多く、同じ質問を繰り返すなど、教師の指示が通らない状況がある。

課題・目標を設定

○ 話を聞き理解する力が育てば、授業内容を理解し、進んで取り組むようになるのではないかと考え、「聞いて理解する姿」を目指す姿に設定し、そのための授業づくりを目指していく。

具体的な取組を検討

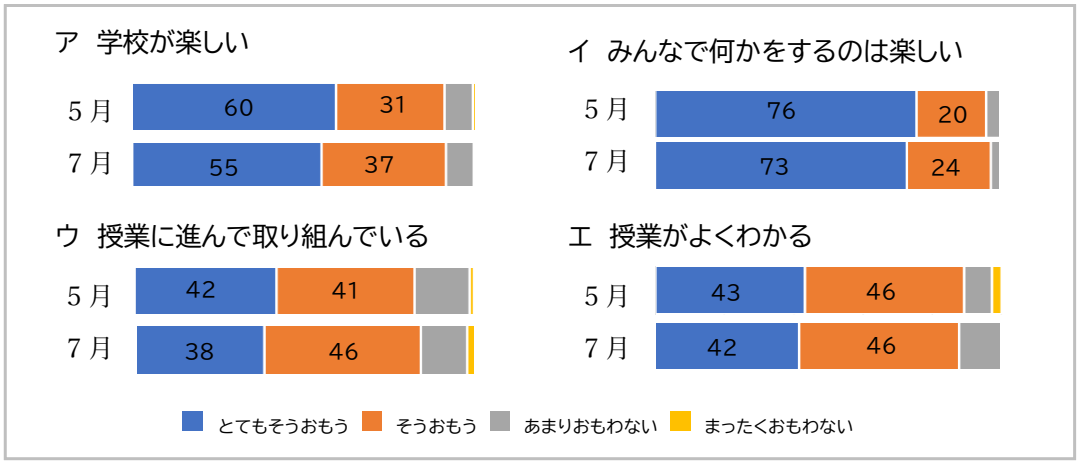
○　「聞いて理解するための視覚的な工夫」に取り組む。
（例）・ 文字や絵、言葉、身振り、表情を使って伝える。
・ 話す、伝える＋板書する（視覚的に訴える）。
・ 授業などで、本時の内容やゴールを視覚的に示す。（見通しを持たせる）
・ 指示内容や手がかり、行い方等を視覚的に示す。

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

D（実行） ５月～７月　具体的な取組の実施

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

C（点検） ７月　アンケート調査の結果等の分析



■ アンケート調査の結果を基に、学年会で児童の状況及び今後の取組等について話し合った。

○ 授業の内容が難しくなり、「エ　授業がよくわかる」の「とてもそうおもう」が減少したのではないか。
○ 視覚的な工夫の効果はまだ表れていないが、改善しながら継続することで、「ウ　授業に進んで取り組んでいる」、「エ　授業がよくわかる」の数値は上がっていくのではないか。
○ クラス内で、係活動を大切にしたり、みんなで何かをする体験をさせたりしたことで、「イ　みんなで何かをするのは楽しい」の「そうおもう」が増加したのではないか。
○ 「イ　みんなで何かをするのは楽しい」のアンケート項目の「とてもそうおもう」の数値が高い。友達と協力しながら、みんなで取り組むことが好きな児童が多いのではないか。

取組の点検・見直し

○ 授業づくりや集団づくりの中で、「イ　みんなで何かをするのは楽しい」に注目して取組や働きかけを検討する。
○ 児童たちのよいところを伸ばしていくことで、苦手なところが改善されるかもしれない。

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

A/P（修正/計画） 7月　目標や取組の修正、方向性の共有

○ 2学年の強みを生かして、生活科の単元で、なかよしまつりを児童が主体的に取り組んでいく。
2学年以外にも共通理解しておき、1学年を招待することを検討する。

○ 聞いて理解するための視覚的な工夫等も、クラスの実態に応じて実施する。

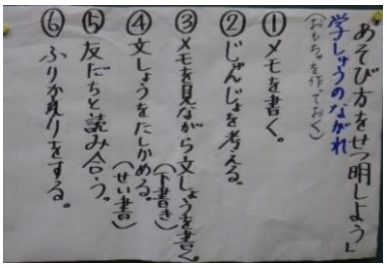
1組：指示の視覚化、話を聞く前のルールの明確化
2組：指示の視覚化
3組：称賛等の工夫による継続的な姿勢の指導

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

D（実行） 7 月～12月　具体的な取組の実施

○ 児童主体での『なかよしまつり』の実施に向けた準備
- なかよしまつりに向けて、「1年生が楽しめるように」という方向性を示して取り組ませた。
- 児童同士が関わる機会を多く取り入れた。
- 児童が主体となって取り組めるよう、各班で役割分担をしたり、話し合ったりして活動するようにした。

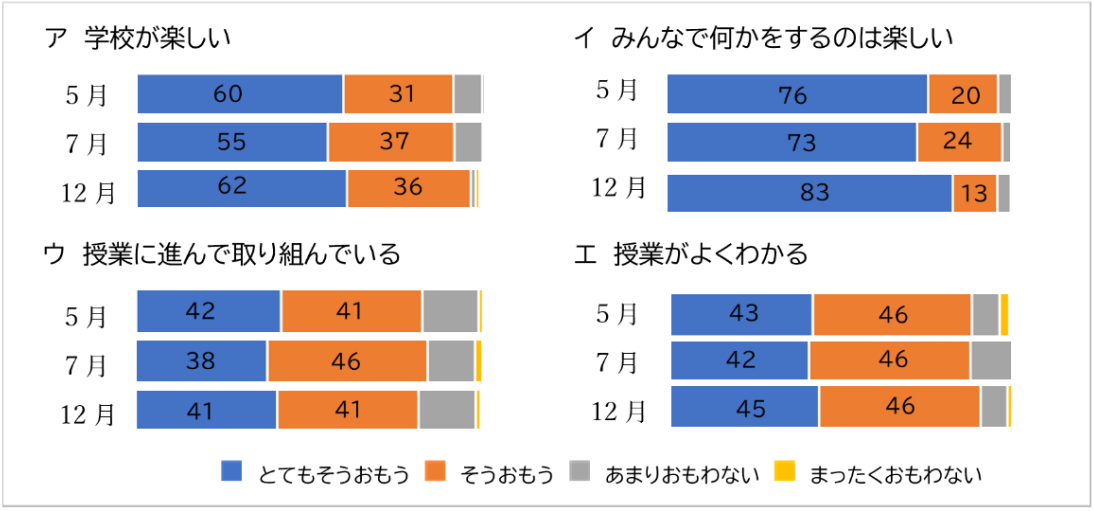
【なかよしまつりに向けての取組の様子】



○ 聞いて理解するための視覚的な工夫等
- 指示をする時に文字や絵も使って行ったり、話を聞くルールを決めたりした。
- 姿勢指導でよい姿勢であった児童などにシールをあげたが、あまり効果がなかったので、朝の会など日常の中で良いところを意識して褒めるようにした。

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

C（点検） 12 月　アンケート調査等の結果の分析、取組の点検・見直し



■ アンケート調査の結果を基に、学年会で取組の成果や児童の状況等について話し合った。

○ 「なかよしまつりで1年生に楽しんでもらうこと」にみんなで向かっていくことで、「ア 学校が楽しい」や「イ みんなで何かをするのは楽しい」の向上につながったのではないか。

○ 「ウ 授業に進んで取り組んでいる」では、「そうおもう」だった児童が、「とてもそうおもう」と「あまりおもわない」に分かれたように見える。「あまりおもわない」と回答した児童には、どう取り組んで良いのかなどのやり方がわからないという児童がいるのかもしれない。

○ 「みんなで何かをするのが楽しい」だけでなく、「授業に進んで取り組んでいる」についても改善に向けた取組をしていく必要がある。

PDCA サイクル

P D C A/P D C A/P D C A/P D

A/P（修正・計画） D（実行） C（点検） A/P（修正・計画） D（実行）・・・ サイクルの継続・・・

3 成果

○ 2学年は、当初アンケート結果から課題を見いだすとともに目指す姿を明らかにし、共通で指導できることを設定したが、徐々に各クラスの実態にあったものへとブラッシュアップしていった。2回目の訪問時に、藤平教授から「よさを伸ばすこと」の提案をしていただき、2学年職員も腑に落ちた様子で、関心のあることで児童を引っ張っていくことにシフトできた。

○ 2学年は、今年度は経験の浅い若手の担任2名が配属されているが、学年主任を中心に協力し合うとともに、本事業を通して様々な工夫を重ねてきた。本事業は、児童にとっても良かったが、担任たちが成長できた機会となった。実際に各学級も、学びに向かう集団になってきている。

○ 先生方は、視覚的に指示を提示するなど、児童に指示が伝わりやすくなるよう心がけるようになった。

○ 生活科で実施する「なかよしまつり」で1年生を招待して楽しんでもらうことを目指し、児童の思いや学習を支援する姿勢で授業を進めたり、他教科と関連付けながら学習を進めたりすることで、児童が主体的に考え、活発に協働する様子が見られるようになった。実際に各学級も、学びに向かう集団になってきている。

4 今後の取組

○ 「授業に進んで取り組んでいる」や「授業がよくわかる」に注目して、達成感や手応えを感じられる体験的な要素を取り入れていく。

○ 授業づくりにおいて、目的意識を持って授業に臨ませるため、導入でめあてを共有したり、授業中にめあてに戻すような声かけをしたり、よい取組の児童をみんなの前で褒めたりする。

○ 前時の授業を振り返り、児童からあげられた課題などを生かしてめあてを設定する。

○ 学校として、本事業で学んだ考え方などを今後も生かして行く。

2 令和5年度「学業指導応援チーム派遣事業」の実施校における取組
日光市立下原小学校　全学年（第1学年～第6学年）

実態に応じた「集団づくり」と「授業づくり」の視点を学校全体で共有し、具体策を実践した取組

1 取組の概要

学業指導における「コミュニケーション能力を育む授業づくり」の視点による授業改善と、「帰属意識の高い学級づくり」の視点による学級経営を柱として、それらを相互に関連させながら、集団としての質の向上を目指した。

（1）児童の現状等

○　明るく元気で休み時間には校庭で体を動かして遊ぶ児童が多い。
○　衝動的かつ感情的に行動してしまい、じっくりと落ち着いていることの難しい場面も多く見られる。
○　相手の心情を慮ることができずに、傷付けてしまう言動をする児童もいる。
○　児童間のトラブルも少なくない。

（2）実態を踏まえて設定した期待する児童の姿

○　他人の話を最後まで落ち着いて聞くことができる児童
○　あいさつや時と場に応じた言葉遣いができる児童
○　物事の善悪を見極め、行動できる児童
○　他者の心情や考えを察したり、尊重したりできる児童

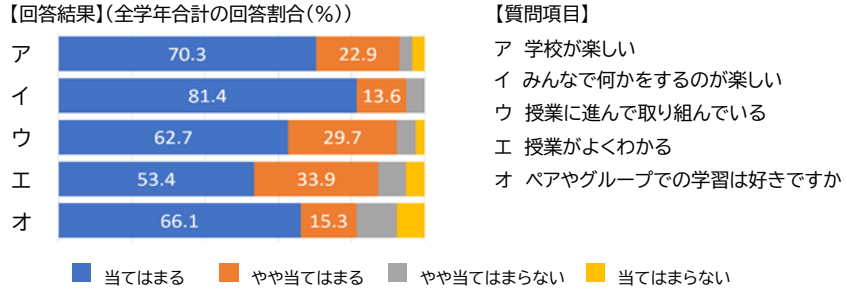
（3）主な取組

○　学校全体で共通理解を図り、各学級で実践する取組の視点
・「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」については「コミュニケーションを育む授業」
・「学びに向かう集団（学級）づくり」については「帰属意識の高い集団（学級）」

2 PDCA サイクルで進めた取組

PDCA サイクル
P　D　C　A/P　D　C　A/P　D　C　A/P　D

P（計画）５月　**児童の意識を把握（アンケート調査の実施）**



※ アから「帰属意識の高い集団（学級）について検証する。
※ オを学校独自のアンケート項目として設定。この項目から「コミュニケーションを育む授業」について検証する。

■ **アンケート調査（5月）の結果を基に、校内研修会で児童の姿や今後の取組等について話し合った。**

○　話すことについて、児童の自由記述からは「自分の意見を言うのが少し苦手。」と捉えている児童がやや多いことが分かった。

課題・目標を設定

○　話すことが苦手な児童も、自信がもてるような取組を行えると良い。
○　「朝の会」や「帰りの会」等で級友の良いところを発表し合う活動を取り入れると良いのではないか。また、その内容等を掲示物等にする等、児童の生活環境の中で、自然と目にすることができるように工夫する。

具体的な取組を検討

学びに向かう集団づくり
⇒帰属意識の高い集団（学級）
- 児童によるめあての設定とふりかえり
- 友達の良いところを探す（発表と掲示）

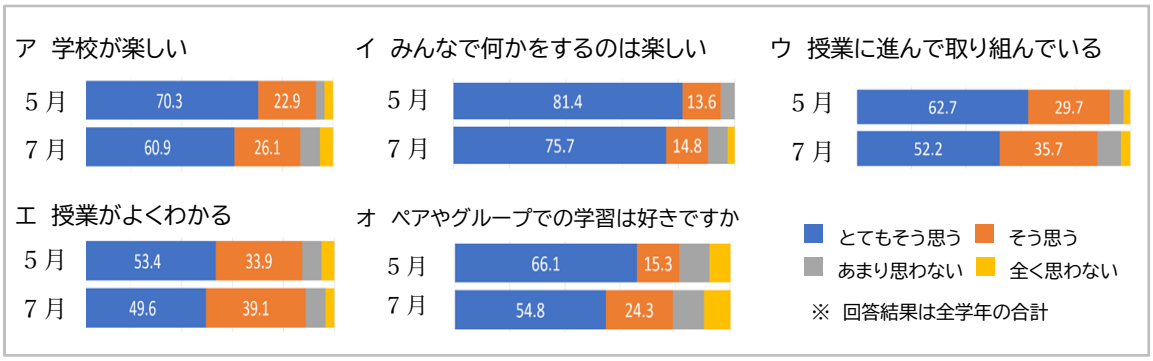
子どもが意欲的に取り組む授業づくり
⇒コミュニケーション能力をはぐくむ授業
- 話し合いの時の資料の活用（話し方、聞き方）
- 話し方、聞き方の練習

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

D（実行） ５月～７月　**具体的な取組の実施**

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

C（点検） ７月　**アンケート調査の結果等の分析、取組の点検・見直し**



■ **アンケート調査（7月）の結果を基に、校内研修会で「集団づくり」グループと「授業づくり」グループに分かれ、取組の成果や児童の状況等について話し合った。**

学びに向かう集団づくり
⇒帰属意識の高い集団（学級）

児童によるめあての設定とふりかえり
【話し合い活動による学級目標の設定、各行事におけるめあての設定】
○ 子どもたちでめあてを設定し活動することを通して、「学級で決めたことが実現できた」という達成感を得られた。
○ めあてに沿った振り返りを行うことで、次の活動への意欲向上に繋がった。また、学級や級友の良さを実感することもできた。

友達の良いところを探す
【友達の良いところを発表する場の設定、友達の良いところの掲示（可視化）】
○ 朝の会、帰りの会を利用し、1分間スピーチ等で友達の良いところを発表することを通して、自己存在感や自己有用感が高まった。
○ 児童の生活の場に「○年生のきらきら」「みんなのいいね」等の掲示物コーナーを設置したことで、友達のいいところに気づける児童が増えた。

子どもが意欲的に取り組む授業づくり
⇒コミュニケーション能力をはぐくむ授業

話し合いの時の資料の活用
【話し方・聞き方のルール、話し方・聞き方の例示】
○ ルールを明確にすることで、安心して児童が活動に取り組めた。
○ 例文を配付したり、資料を掲示したりすることで、困った場面でも児童がそれらを確認しながら活動できるようにした。

【話し方、聞き方の練習】
○ 話し合いのスキルを身につけるための時間を設けることで、自信をもって活動できる児童が増えた。
○ 聞くことを大切にしたことで、児童がそれを意識して生活している場面が増えた。

PDCA サイクル

A/P（修正/計画） 7 月　目標や取組の修正、取組の方向性の共有

学びに向かう集団づくり⇒帰属意識の高い集団（学級）

（1） 学級全体で行うめあての設定と振り返り活動
- 話し合い活動による学級目標の設定
- 授業や各行事におけるめあての設定

（2） 認め合える場の設定と支援の工夫
- 友達の良いところを発表する場の設定
- 友達の良いところの共有（可視化）
- 担任・担任以外の教員からの価値づけ

子どもが意欲的に取り組む授業づくり⇒コミュニケーション能力をはぐくむ授業

（1） 安心して発言できる雰囲気づくり
- ルールや話し方の例示
- ステップアップ教室での話し合いの練習

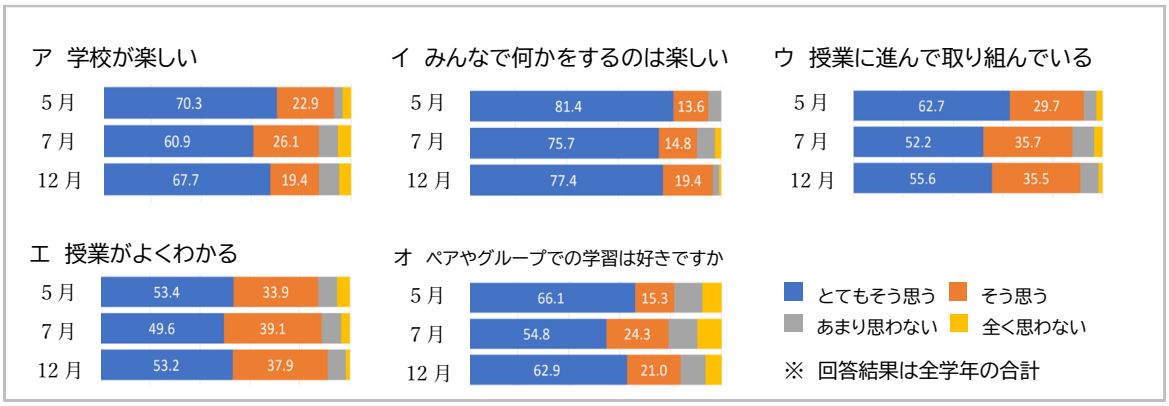
（2） 話し合いの内容を充実させる取組
- 問題文や課題文に印をつけて、内容を確認する
- めあてとゴールの整合性
- 話し合いの目的の明確化

PDCA サイクル

D（実行） 8月～12 月　具体的な取組の実施

PDCA サイクル

C（点検） 12 月　アンケート調査の結果等の分析、取組の点検・見直し



■ アンケート調査（12月）の結果を基に、校内研修会で取組の成果や児童の状況等について話し合った。

【学校の取組に直結している問ア及び問オについて】

○ アについて 2回目の調査より「当てはまる」と回答した児童の割合が増加し、「やや当てはまる」が同数程度減少した。このことから、2回目の調査で「やや当てはまる」と回答していた児童が今回の調査では「当てはまる」のグループへ移行したことが想定される。「学校生活が楽しい」との設問に「当てはまる」と感じる児童の状況について改善が図られたものの、肯定的回答と否定的回答の割合に大きな改善は見られなかった。

○ オについて 2回目の調査より「当てはまる」との回答が増加、「やや当てはまる」を加えた肯定的な回答についても増加となり、「ペアやグループで活動することが好き」と捉える児童の割合が増加した。ペアやグループでの活動に抵抗を感じる児童は減少したことがうかがえる。

【アンケート調査結果の分析（協議における教師の声）から】

○ 司会を決めたり、自分の意見や考えをまとめる時間を確保したりすることで、話し合いが活発で充実した内容になった。

○ 目的意識をもたせる活動を行ったり、話し合いを習慣化したりすることでペアやグループでの活動に抵抗を感じる児童は減少した。

○ 話し方・聞き方の「例示の仕方」や「個人差をなくす手立て」はブラッシュアップしていきたい。

PDCA サイクル

P D C A/P D C A/P D C A/P D

A/P(修正・計画)　D(実行)　C(点検)　A/P(修正・計画)　D(実行)・・・　サイクルの継続・・・

3 成果

○ 全教職員で共通理解を図り、実践できた。また、子どもたちの姿と客観的なアンケート結果をもとに、その取組が効果的であったか、改善の余地があるのかを具体的な内容をもとに協議できた。学級の実態や発達段階によって、実践内容等に微調整が必要な場合もあった。

○ 一つの成果としては、保健室の利用が大幅に減少した。児童間のトラブルの減少、授業への参加意欲や生活全般の落ち着きの向上が見られたことがその要因と考えられる。学業指導との関連については、現時点では明確に言うことはできないが、少なからず影響しているものと考える。

【学びに向かう集団づくり(帰属意識の高い集団(学級)づくり)】

○ 学級全体で行うめあての設定と振り返り活動を行った。めあてに沿った振り返りと次の活動への意欲、学級や友達のよいところを記入できるように、ワークシートを工夫して取り組んだことで、活動の中で友達のよいところを見つけられる児童が増えた。

学級活動では、全員で活動する機会を児童から提案し、計画から実施、振り返りまで行った。その結果、みんなと協力して何かを行うことが好きだとアンケートで回答している児童の割合が増加した。

【子どもが意欲的に取り組む授業づくり(コミュニケーション能力をはぐくむ授業づくり)】

話し方ルール	聞き方ルール
た：正しい姿勢で	あ：相手をよく見て
ち：ちょうどよい声の大きさで	い：一生懸命に
つ：伝わるように，はっきりと	う：うなずきながら
て：適当な速さで	え：笑顔で最後まで
と：友達に分かるように	お：おしゃべりせずに

○ ルールや話し方の例示をしたり、ステップアップ教室での話し合いの練習をしたりすることで、児童が安心して発言できる環境を整えた。グループや任意小集団で活動することにより、難易度が高い課題にも、積極的に話し合ったり、お互いの意見を尊重したりしながら結論を導き出したりする姿が見られた。

児童に活動の見通しを持たせられるように教師が働きかけたことで、目的意識をしっかり持ちながら活動している児童が増えた。

4 今後の取組

○ 今年度、訪問を機に協議を行い、実践内容等を具体化し精査して、全教職員で取り組んできた。今後も定期的に取組を見直し、ブラッシュアップを図りながら継続して実践していく。

3

令和６年度「学業指導応援チーム派遣事業」の実施校における取組
矢板市立矢板小学校　第3学年（実際は全学年で実施）

PDCA サイクルに基づいた「集団づくり」「授業づくり」

1　取組の概要

PDCA サイクルを重視し、“児童のために”という熱い思いをもって望ましい「集団づくり」「授業づくり」に向けた取組を工夫した。

特に「児童が授業に進んで取り組むためにはどのような手立てが考えられるのか」、「児童にとってわかりやすい授業とはどのような授業なのか」、「児童の主体性を育むための活動とはどのようなものがあるのか」の視点を中心に熟議を重ねた。

（1）児童の現状等

○ 課題に対して積極的に取り組むことができる。
○ 最後まであきらめずに、こつこつと取り組む児童が多い。
○ 係活動や当番活動に熱心に取り組める。
○ ルールを守って行動しようとする児童が多い。

（2）期待する児童の姿

○ 自分の考えをもち、安心して表現できる児童
○ 友だちとの交流から思考を広げ、新たな思考を生み出せる児童
○ 集団の一員であることの喜びを実感できる児童
○ 主体的にルールを遵守できる児童

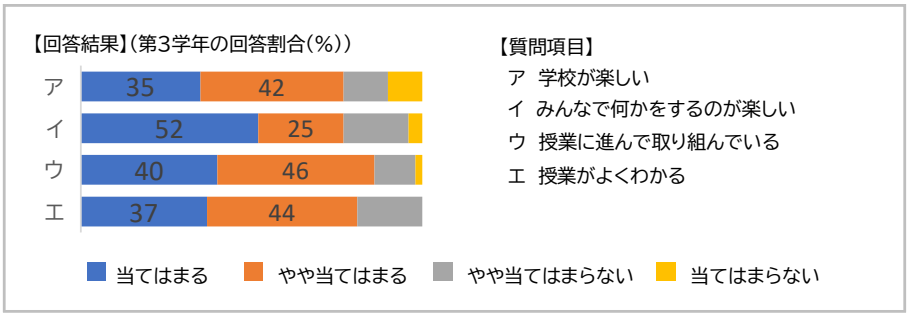
（3）主な取組

○ 児童の主体性を育む学級経営・学校生活の工夫
○ ICT機器や多様なグループ活動、構造的な板書を活用した学習展開の工夫
○ 児童が互いに認め合い、協力し合える場の設定

2　PDCA サイクルで進めた取組

PDCA サイクル
P　D　C　A/P　D　C　A/P　D　C　A/P　D

P（計画）5月　**生徒の意識を把握（アンケート調査の実施）**



■ **アンケート調査（5月）結果を基に、全職員で児童の状況及び今後の取組等について話し合った。**

課題・目標を設定

○ 人前で発表することができる児童を育成する。
○ 個別に声掛けをし、話を最後まで聞ける児童を育成する。
○ 日常の生活を通して、善悪の判断ができる児童を育成する。
○ 時間を守る意識や公共の場所での適切な過ごし方ができる児童を育成する。

具体的な取組を検討

○ 学級づくり（帰属意識の高い学級）
・ 学級活動や共有の時間を有効に活用しながら、認め合いの場や協力し合える場を設定し、児童が安心して生活できる雰囲気を醸成することにより、集団の一員であることの喜びを味わわせていく。

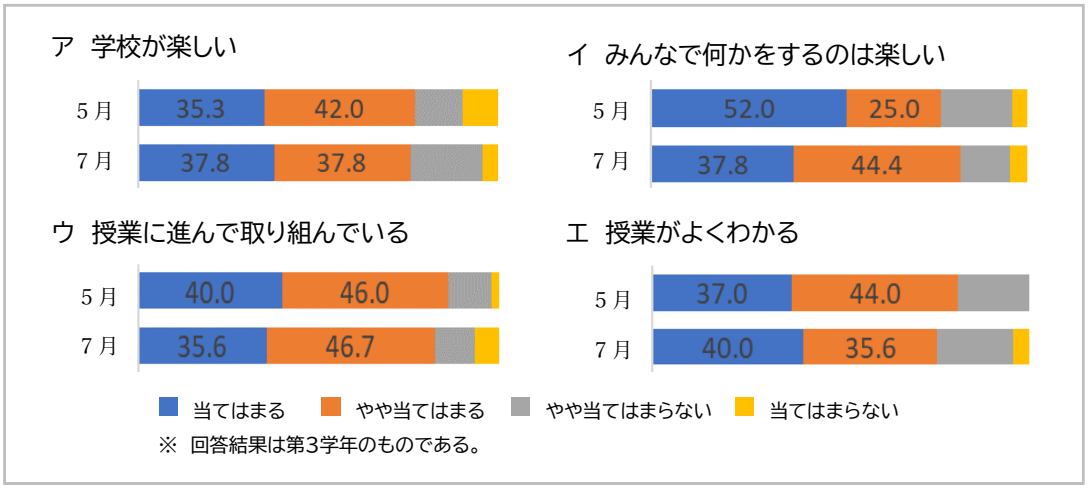
○ 授業づくり（コミュニケーション能力を育む授業）
・ 自分の考えをもつための十分な時間の確保と授業展開の工夫を行うことにより、活発な交流ができるようにしていく。

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

D（実行） 5月～7月　具体的な取組の実施

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

C（点検） 7月　アンケート調査等の結果の分析



■ アンケート調査（7月）結果を基に、全職員で児童の状況及び今後の取組等について話し合った。

○ 1回目の訪問で具体的な取組を決定し、6月～7月に実施した。時間が短かったため、取組の成果は限定的であった。

取組の点検・見直し

○ 運動会が10月にあるので、学校行事を上手く活用し、みんなで何かをするのは楽しいと思えるよう工夫していく。
○ わからないことを、わからないと意思表示することが難しい児童が一定数存在する。わからないことをわからないと言える学級風土になるよう心がける。
○ 自分から積極的に発表する児童が少ないので、児童から出たつぶやきや疑問を教師がつなぎ、児童の思いを引き出す。

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

A/P（修正/計画） 7月　目標や取組の修正、取組の方向性の共有

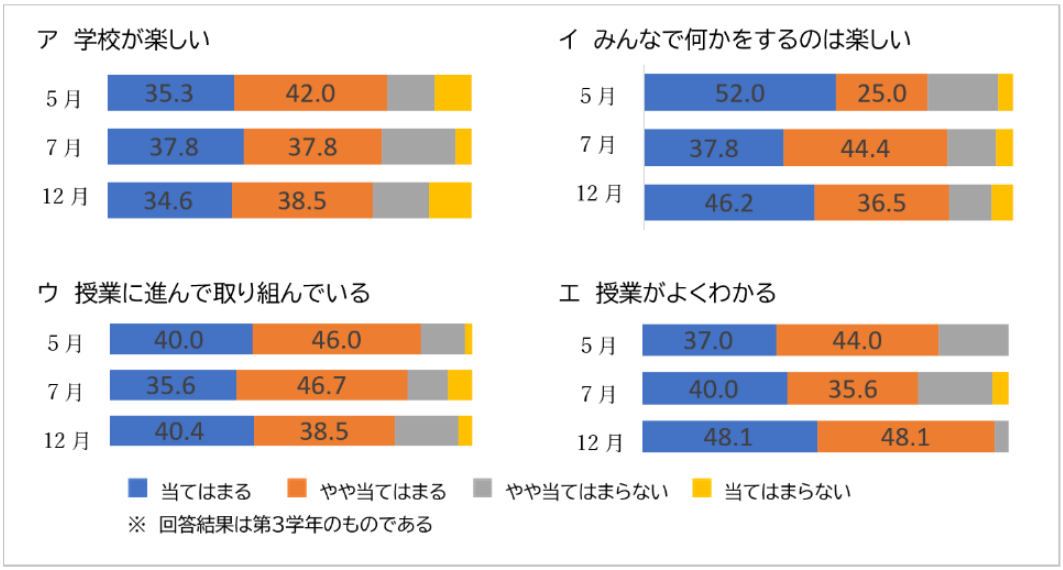
○ 特に、「エ　授業がよくわかる」に重点を置き、取組を進めていく。
○ 少なくとも1日1回すべての児童を承認したり、賞賛したりできる場を設ける。
（児童の良さを見つけ、教師が積極的に価値付けしていく。）
○ グループ活動やペア学習がより効果的になるよう、まずは相手の話を「聞く」指導を徹底し、お互いの意見を受け入れられるような雰囲気をつくる。
○ すべての児童が視覚的に確認しやすい板書計画を工夫する。

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

D(実行) 8月～12月 具体的な取組の実施

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

C(点検) 12月 アンケート調査の結果等の分析、取組の点検・見直し



■ 校内研修会で、アンケート調査の結果を基に学年ごとに話し合った。

○ 特に「エ 授業がよくわかる」に重点を置き取り組んできたが、徐々に教師の働きかけが浸透している。

○ 「エ 授業がよくわかる」の項目で、「当てはまる」と回答した児童が徐々に増えてきている。また、否定的な回答(「やや当てはまらない」「当てはまらない」)が大幅に減少している。

○ 3年生は学習内容の抽象度が高くなり、難しくなってきているが、どの児童も授業に一生懸命取り組んでいる。これは、教師側が結果のみにとらわれず、学習の過程や諸活動の過程にも目を向け、児童を賞賛したり、励ましたりしている成果だと考えている。

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

A/P(修正・計画) D(実行) C(点検) A/P(修正・計画) D(実行)・・・ サイクルの継続・・・

3 成果

○ 児童の変容

- 教師側の意図的な働きかけもあり、「わからない」と意思表示できる児童が増えてきている。
- 学級や個の実態に応じた支援体制を検討する機会を確保することにより、児童の学習意欲が高まり、家庭学習の習慣化にもつながっている。
- グループ学習やペア学習、トリオ学習等の活動の際、お互いの話を最後まで聞き合えるようになってきている。
- 学習や生活の中で協働的な活動を計画的に取り入れたことにより、人間関係が良好になり学級内のトラブルが減少してきている。
- 学級のルールやクラスイベント、行事の計画に児童の意見を積極的に生かしていくことにより、学校生活への主体性が育成され、学校生活への満足度が高まった。

○　先生方の意識

- 児童の意識調査を定期的に実施し、調査結果を細かく分析することにより児童の実態を的確に把握することができた。望ましい学級集団づくりや授業改善における明確な目標を設定して取組を進めている。
- 取組におけるPDCAサイクルの日常化が見られるようになってきた。
- 教師が児童の良さに目を向け、良さを伸ばそうという視点で取組を考えている。
- 教師が児童を変えるという意識ではなく、児童自身が気付くことができるよう、教師がどのような働きかけができるのかという視点で議論が進んでいる。

○　取組の手応え

学業指導を充実するための視点を柱にした指導・援助の計画・実践・改善を進めていく中で、児童の社会性や学習意欲の向上している様子が学級内で見られるようになり、取組の有効性を多くの職員が実感できた。

【「集団づくり」や「授業づくり」で手ごたえを実感した取組の例】

「集団づくり」

①「帰属意識の高い学級づくり」の視点から

○　協働的な活動のルール化や計画的な導入を図る。（話合いのきまりの作成、クラスイベントの企画等）

②「規範意識の高い学級づくり」の視点から

○　休み時間や給食の時間のルールづくりを児童が主体となって行う。

③「互いに高め合える学級づくり」の視点から

○　運動会や修学旅行において、児童の意見を生かしながら計画運営を進めていく。

「授業づくり」

④「自信をもたせる授業づくり」の視点から

○　児童の意見や疑問を教師が価値づけをする。

○　児童の意見をつないで、1つの意見をつくり上げていく。

⑤「コミュニケーション能力を育む授業づくり」の視点から

○　形態や方法を工夫したグループ活動を積極的に導入する。

⑥「一人一人の実態に配慮した授業づくり」の視点から

○　児童が選べるような問題を取り入れる。

○　自分なりの発想で自由に活動する場面を大切にする。

4　今後の取組

学年ごとに、アンケート結果を分析しながら、児童への関わり方や授業中の手立てについて検討し、実践してきた。また、学業指導応援チーム派遣の学校訪問をきっかけとして、実践内容等を振り返ったり、新たな具体策を検討したり、全教職員で取り組んできた。今後も定期的に取組を見直し、常に「児童のために」を念頭に継続して実践していく。

4 令和6年度「学業指導応援チーム派遣事業」の実施校における取組
足利市立青葉小学校　全学年（第1学年～第6学年）

子どもたち一人一人が大切にされ、安心して学ぶことのできる『集団づくり』と『授業づくり』に向けてPDCAサイクルにより学校全体で組織的に実践した取組

1 取組の概要

PDCA サイクル第1期では、児童の実態から「集団づくり」と「授業づくり」について、それぞれの課題と思われることを検討し、学年ごとに学業指導の視点を入れた具体的な取組を検討し実践した。

PDCA サイクル第2期では、児童や学級のうまくいっていることを生かしながら、学級全員に対して、日常的に継続できる具体的な取組＜4つのポイント＞を意識して実践した。

実践後、教師の具体的な取組が子どもにとって、何をしたことにつながったかを考察し、各学年の効果的な取組を全教職員で共有し、振り返った。

（1）児童の現状等

青葉小学校は、足利地区中央通学区域の学区再編成に伴い、市の文教地区において、平成12年に開校した学校である。地域の方々は教育に高い関心を持ち、学校教育に対しても支援・協力を惜しまず、常に児童を中核とした学校づくりを推進している。

学校教育目標として『進んで学び、よく考える子』『心が豊かで、思いやりのある子』『心身が健康で、たくましい子』を掲げ、児童には、自他を大切に思う気持ち、相手への言葉や行動、相手の思いに気づき、感謝する心を育成することを目指している。また、学校、家庭、地域と連携し、共に理解し合いながら教育の充実を図り、信頼関係の構築に努めている。

日常の教育活動において、児童一人一人のよさや持ち味を生かし、児童同士のふれあいを通して、互いに尊重し、支え合う人間関係づくりを目指している。それに伴い、各学級でも、自分の考えを持ち、それを表現することや自分たちで決めた活動を自主的に進められることに重点を置き、指導が進められている。

学習の中でも、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた、常時活動の工夫と支援の必要な子への全校体制での支援を行うことで、意欲的に自ら学ぼうとする児童や深く考えようとする児童を育成する取組が行われている。

（2） 期待する児童の姿

○ あいさつなどの基本的な生活習慣が身に付いており、 児童一人一人が、主体的に活動に取り組み、互いのよさを認め合い、協力することの素晴らしさや友達との関わりを楽しむことができる。

○ 児童一人一人が基礎的・基本的な学習内容を身につけ、自主的に学習を進めることができる。また、安心感をもって自分の考えを持ち、それを表現したり、相手の考えを聞いたりして学ぶことができる。

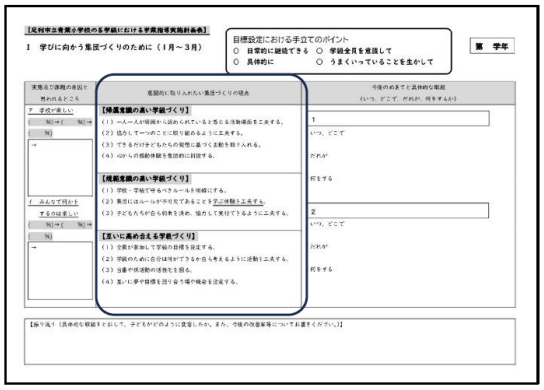
○ 児童一人一人が学習のめあてと見通しをもち、児童自身が自分の言葉で伝えたり、学習形態（ペア・グループ・全体）に応じてコミュニケーション能力を育む授業をしたりしていく中で、友達と意見を深めながら協力し合うことの楽しさに気付くことができる。

○ 異年齢集団を生かした活動を通して、豊かな人間関係をつくり、学級の友達だけでなく、異学年の友達と仲良く交流していく中で、相手の立場を理解し、他人を思いやることができる。

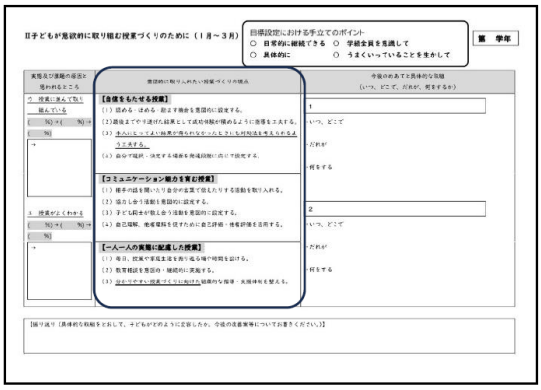
(3)主な取組

ア　全学年(第1学年～第6学年)で取り組んだ組織的な実践

イ『集団づくり』『授業づくり』それぞれの視点を取り入れた具体的な取組の設定及び実施計画書の活用



『集団づくり』の実施計画表

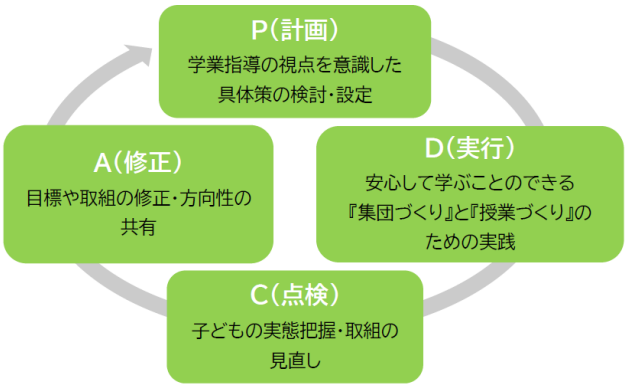


『授業づくり』の実施計画表

○　具体的な取組の設定で取り入れた4つのポイント

- 日常的に継続できるものであること
- 学級全員を意識して取り組めるものであること
- 具体的で明確な目標であること
- うまくいっていることを生かすこと

ウ　PDCAサイクルの実践による組織的な取組

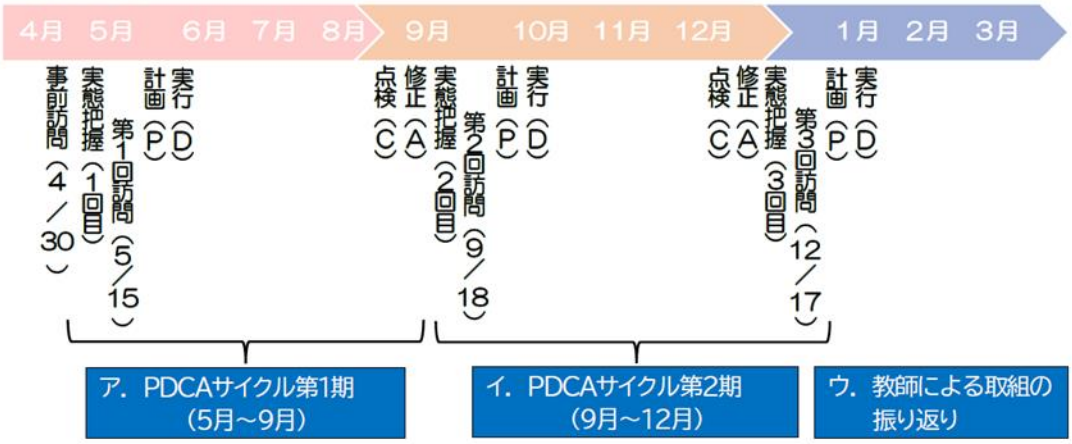


エ　全体を通した教師による取組の振り返り(振り返りシートの活用)

取組の振り返りシート

2　具体的な取組

（1）取組の流れ

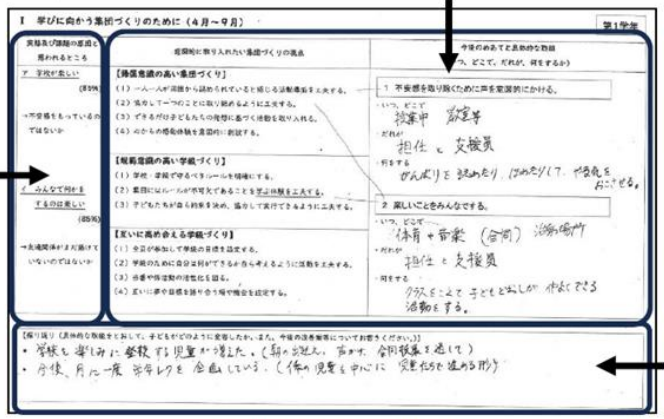


※ PDCAサイクルは、『集団づくり』、『授業づくり』ともに教育事務所で作成した学業指導実施計画表に基づいて実施した。

【第1回学校訪問】	【第2回学校訪問】	【第3回学校訪問 】
・応援チーム派遣事業の趣旨説明 ・応援チームの支援内容の説明 ・「学業指導」についての説明 ・アンケート調査結果について	・学校の取組状況の把握 ・PDCAサイクルの段階に応じた指導・助言 ・アンケート調査結果の分析等 ・今後の学校の取組に関する検討	・学校の取組状況の把握 ・PDCAサイクルの段階に応じた指導・助言 ・前回のアンケート調査結果との比較や分析等 ・PDCAサイクルを通した取組の振り返り

ア．PDCAサイクル第1期の取組について（5月～9月）

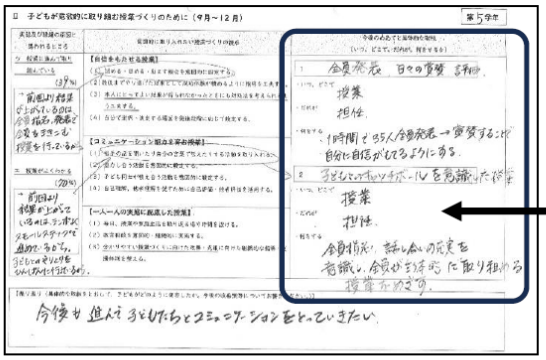
① 実態把握	② 計画(P)、実行(D)	③ 点検(C)、修正(A)
児童の実態から、各学年の先生方が、『集団づくり』、『授業づくり』それぞれ課題の原因と思われるところを検討した。	めあてと具体的な取組の計画を考える際、「集団づくり」では、「帰属意識の高い学級づくり」「規範意識の高い学級づくり」「互いに高められる学級づくり」の三つの視点、「授業づくり」では、「自信をもたせる授業」「コミュニケーション能力を育む授業」「一人一人の実態に配慮した授業」の三つの視点を基にめあてを作った。その際、「いつ」「どこで」「誰が」「何をする」を明確にした取組を立てて実行(D)をした。	振り返りを記入することで子どもの変容を確認した。



『集団づくり』の実施計画表

イ．PDCAサイクル第2期の取組について（9月～12月）

① 実態把握	② 計画（P）、実行（D）	③ 点検（C）、修正（A）
第1期と比較し、日常的に継続し、学級全体を意識した取組において数値が高いことが分かった。このことから第2期のめあては、漠然としためあてや単発的なレクリエーション、アンケート等でのめあては設定しないことにした。	今後の目標と具体的な取組については、前回のアンケート結果と比較し、良好であれば継続した。その際は、何がよかったのかを分析し、数値向上につながる具体的な目標を、前述のポイントを踏まえて設定した。結果が芳しくない場合は、目標設定自体や具体的な内容を分析し、目標を再設定した。	振り返りを記入することで子どもの変容を確認した。



『授業づくり』の実施計画表

※ 実態把握から2回目の目標と取組では、以下の4つのポイントを重視した。

- 日常的に継続できるものであること
- 学級全員を意識して取り組めるものであること
- 具体的で明確な目標であること
- うまくいっていることを生かすこと

ウ．教師による取組の振り返り

取組の振り返りシート

PDCAを2サイクル実践したことに基づき、各学年の先生方は、『集団づくり』と『授業づくり』それぞれについて、児童の姿や学級にどのような変容がみられたかを振り返った。その後、教師の具体的な取組が子どもにとって、何をしたことにつながったかを考察した。

（2） 取組の実践例

全学年で『集団づくり』と『授業づくり』において、PDCAサイクルを2回実践した。
ここでは、第3学年の『集団づくり』の実践と、第1学年の『授業づくり』の実践を記載する。

ア. 『集団づくり』(第3学年)

	実態把握	P(計画)・D(実行)	C(点検)	A(修正)
第一期	【課題】 児童が、学級で相手の気持ちを聞いて自分の思いを伝えること。	【具体的な取組】 日常的に相手のよいことを発表する。 ○いつ、どこで 授業中、休み時間、帰りの会 ○誰が 学級担任 ○何をするか 児童が学級や友達のことを考えて、進んで係活動に取り組んだことを賞賛する。 さらにそのことを帰りの会で伝える。	【子どもの変容】 クラスの児童に喜んでもらうための係活動する子どもが増えた。 賞賛をされたことで自分の行いについて振り返れるようになった。 【教師の振り返り】 教師側が積極的に賞賛することで、相手のことを考えて行動できるきっかけにつながることができた。	・これまでの取組を継続する。 ・さらに、友達との関係づくりのために、子ども同士が、それぞれの児童の思いを伝えられるように支援を行う。
第二期	 子どもが相手の気持ちを理解し、安心感をもって、思いが伝えられるよう支援します。	【具体的な取組】 自分の行動と気持ちを友達に伝える機会づくり ○いつ、どこで 教室の帰りの会 ○誰が 児童 ○何をするか 友達にしてもらってうれしかったこと等を伝え合う機会を設定する。その際、必要に応じて、気持ちが伝わり合うように教師が言葉を補う。	【子どもの変容】 友達同士で認め合うことで良好な関係ができた。 嬉しかった時の気持ちや相手への感謝の気持ちを表現する児童が増えた。 【教師の振り返り】 児童同士が、お互いを認め合うことで、よりよい関係づくりにつながった。	・これまでの取組を継続する。 ・さらに相手の立場や考え方を配慮した上で、自分の考えを伝え合うための機会の確保と子ども同士が安心感をもって活動ができるよう支援したい。

【第1期、2期をとおしての成果】
- 学級全体に対して、児童が学級や友達のことを考え、進んで係活動に取り組んだことを教師が賞賛したり、児童が友達へ感謝の気持ちを伝えたりすることを通して、児童の自己理解及び他者理解を促した。
- 個別支援の際、児童同士で気持ちを伝え合うことができるように、教師が言葉を補ったことが、子どもの安心感につながった。
- 気持ちを伝え合うことのできる良好な児童同士の関係が、さらに友達の喜ぶ言葉を用いて自分の思いを伝えられることにつながった。

イ．『授業づくり』(第1学年)

	実態把握	P(計画)・D(実行)	C(点検)	A(修正)
第一期	【課題】 一斉授業の進み具合が、一人一人の子どもに合っているのだろうか。	【具体的な取組】 個別対応で達成感を味わわせる ○いつ、どこで 算数の確認問題を解く時間 ○誰が 学級担任 ○何をするか 学習状況を確認する。 一人一人に応じた声かけをする。	【子どもの変容】 子どもが最後まで課題に取り組めるようになった。 【教師の振り返り】 誤答の際には、教師が声をかけながら、具体物の操作や絵や図を用いた活動を行ったり見守ったりすることで、安心して最後まで課題に取り組めた。	・これまでの取組を継続する。 ・さらに、視聴覚教材の活用と自力解決の時間を確保する。 一人一人の子どもに合った助言や支援をする。
第二期	 子どもの思いを受け止めながら、安心して活動に取り組めるよう支援します。	【具体的な取組】 「できた」「楽しい」と思える教材の工夫 ○いつ、どこで 授業中(算数のほか、他教科にわたって) ○誰が 学級担任、支援員 ○何をするか 視聴覚教材を活用する。 自力解決の時間を確保する。 机間指導により、一人一人の子どもに合った声かけや支援をする。	【子どもの変容】 視覚的な支援により、見通しをもって課題を解決し、意欲的に発表する子どもが増えた。 【教師の振り返り】 活動内容や手順を視覚的に理解できるよう環境を整えたことで、学習意欲が継続された。 自力解決の時間の確保により、つまずきに応じた個別の支援ができた。	・これまでの取組を継続する。 ・さらに子ども同士が自分の考えを伝え合うための時間の確保と伝え方・聞き方の指導・支援を行い、一人一人の学びを深めたい。

【第1期、2期をとおしての成果】
- 学級全体に対して、視聴覚教材により、具体的に活動の内容や手順(何をしたらよいのか等)を示したことで、学習の見通しをもつことができ、子どもの安心感が高まり、学習意欲の喚起や継続につながった。
- 個別支援の際には、一人一人の子どもにとって考えやすい教材・教具、絵や図などを手がかりにするよう声かけや支援を行うことで、最後まで課題に取り組めるようになった。
- 「できた」「楽しい」と感じられるような指導・支援を継続したことにより、子どもの自信が育まれつつあることを感じた。

3 成果(学校全体)

○ PDCAサイクルを繰り返すことで、より子どもや学級の実態に合った指導・支援になることを体感した。

○ 実践の振り返りとして、具体的な取組から子どもの変容をあらためて見直すことで、子どもの安心感を高め、自信を育む指導・支援が重要であることを再確認した。【参考1】

○ 全教職員が全ての子どもを意識し、うまくいっていることを生かした日常的に継続できる実践を重ね、互いに共有し合ったことで、教師同士が学び合う機会となった。

○ 1回目のアンケート結果から学校生活に対して肯定的に捉えている児童の割合が高い状況をさらに全校で高めたいと考え、 青葉小学校では、全学年で取り組んだ。実際、児童の主体性を生かし、一人ひとりのよさを互いに認め合えるような学級づくり、授業づくりを基盤とした学業指導の実践は 、学校教育目標の具現化することにつながった。【参考2】

4 今後の取組

○ 今回の取組は、アンケート結果に基づいた現状分析が効果的であったことから、今後も PDCA サイクルを基盤とした継続的な改善をしていきたい。

○ 学業指導の「集団づくり」「授業づくり」という視点を踏まえ、相互の関連を意識して、今後も取り組んでいきたい。

○ 教師の具体的な取組実践が、児童の姿や学級にどのような変容につながっていくのかについて、今後も学年で時間をとって取組を行う。

【参考1】具体的な実践における各学年の成果

	学びに向かう集団づくりのために	子どもが意欲的に取り組む授業づくりのために
第1学年	**○居場所や活躍の場をつくる工夫** 授業において、一人一役仕事を与え、みんなの前で賞賛したことで、児童の自己有用感が高まり、責任感とやりがいを感じるようになり、主体的に行動できることにつながった。	**○不安感をもつ児童の対処の工夫** 座席配置の工夫や、教師がお手本を示すことで、児童は安心感をもって授業に取り組むことにつながり、自分の考えを発表する児童が増えることにつながった。
	○学年の児童みんなで楽しむ活動の実施 児童中心の活動をしたり、学年で作成した掲示物を掲示したりしたことで、学年全体の一体感を生み出し、学年内で温かい雰囲気を育むことにつながった。	**○できた、楽しいと思える教材の工夫** 個別の声かけや視聴覚教材により、具体的に活動の内容や手順を示したことで、学習の見通しをもつことができ、児童の安心感が高まり、学習意欲の喚起や継続につながった。
第2学年	**○係活動の充実** 模範的な行動ができる児童を賞賛することで、児童の自己有用感が高まり、更なる模範的な行動を促すことにつながった。	**○発表する機会の増加** 児童に声をかけたり、うまくいかなかったことに対しての対処法等を児童とともに考えたりすることで、児童の安心感が高まり、積極的に発表することができる児童が増えることにつながった。
	○クラス共遊の時間の確保 児童の思いが反映された活動を取り入れることで、学級への帰属意識の醸成につながり、児童が意欲的をもって活動できることにつながった。	**○わかる、できたを実感する授業の工夫** 児童の実態に合わせた問題を授業中に取り組ませることで、「わかる」「できた」喜びや成功体験を積み重ねることで児童の自信につながり、学習意欲が高まることにつながった。
第3学年	**○自分の気持ちを伝えられる** 児童が学級や友達のことを考え、進んで係活動に取り組んだことを教師が賞賛したり、児童が友達へ感謝の気持ちを伝えたりすることを通して、児童の自己理解及び他者理解を促すことにつながった。	**○自ら発表できる機会の増加** 机間指導でノートチェックをし、事前に児童が、発表できるようにしたことで、児童の安心感が高まり、発表への自信につながった。
	○みんなで遊ぶ活動の設定 活動内容に不安を抱える児童に共感し、その子のサポートをしたことで、学級全体でルールの必要性を考えるようになり、誰もが安心して活動を楽しめることにつながった。	**○個別指導と教え合い** 不安を抱える児童への個別指導や意図的な児童同士の教え合いを行うことで、児童一人一人が自信を持つことにつながり、グループやペアで考えを伝えたり深めたりすることができることにつながった。
第4学年	**○自分のよさをつかめる活動及び声かけ** 児童のよさを学級全体に教師が紹介することで、児童の自己肯定感が高まり、自信をもって発言したり、積極的な行動したりできることにつながった。	**○算数の授業で児童の学びの実態に合わせて発展問題の提示** 日々の授業で児童一人ひとりの状況を把握し、達成感を得られるように工夫したことで、学習意欲が高まり、児童は発展課題に積極的にチャレンジする意欲につながった。
	○規範意識を高める体験活動の実施 学年全体でルールを共有し、その意義を理解することで、児童は自己を客観的に見つめ、トラブル時には互いに誠意をもって対応する態度が育成され、規範意識が高まることにつながった。	**○授業の終末に、子どもとともに学んだ内容の確認** 学習のまとめや振り返りにより、児童が自己の学びを認識することで、学級で学ぶ楽しさを実感することにつながった。
第5学年	**○会社(係)活動** 児童の発想に基づく活動を取り入れることで係活動の活性化を図ることで、互いに高め合えるよい学級づくりにつながった。 	**○全員発表、日々の賞賛、評価の場の設定** 全員発表できるよう授業を構成し、児童を賞賛する機会を増やすことで、児童は自信を育み、多様な意見を認め合うことにつながった。
	○子どもに進んで声かけや寄り添い 個々の児童に意図的に働きかけることで、教師と児童との信頼関係が深まり、居心地のよい環境が醸成され、帰属意識が高まることにつながった。	**○子どもとのキャッチボールを意識した授業** 全員を指名してコミュニケーションを育む授業を行ったことで、児童が主体的に活動に取り組み、話合い活動を通して学ぶ意欲の向上につながった。
第6学年	**○修学旅行を通して、みんなで協力する意識の向上** 学級において児童たちで決めたことをできるだけ取り入れることで、帰属意識が高まり、児童たちが協力して活動できることにつながった。	**○一人一人の実態に合わせた学習の実施** 児童の実態に合わせた学習を取り入れることで、苦手な学習にも取り組めるようになり、児童が意欲的に学習することにつながった。
	○会社(係)活動を充実させることで、一人一人のよさの伸長 係活動の活性化を図るために児童一人一人のよさを生かせるような声かけをしていくことで、達成感や自己有用感を高め、活動意欲の高揚を図ることにつながった。	**○児童へのたくさんの賞賛** 学級活動時に意図的に児童を称賛する機会を設けたことで、自己有用感が高まり、児童一人ひとりが責任感を持って活動に取り組めるようになった。

【参考2】1 回目から3回目のアンケート調査結果

アンケート調査（１回目：５月実施　２回目：９月実施　３回目：１２月実施）

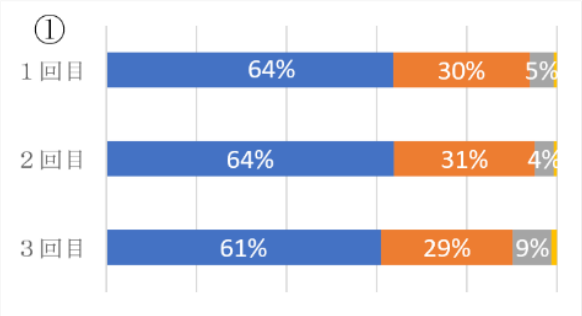
【質問項目】（共通）

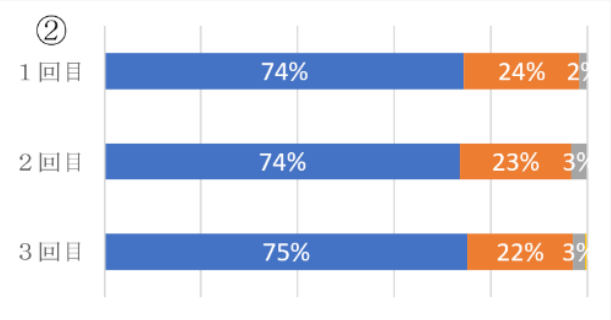
① 学校が楽しい
② みんなで何かをするのは楽しい
③ 授業に進んで取り組んでいる
④ 授業がよくわかる

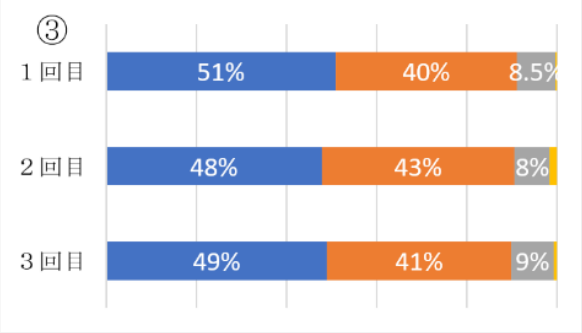
【回答内容】（共通）

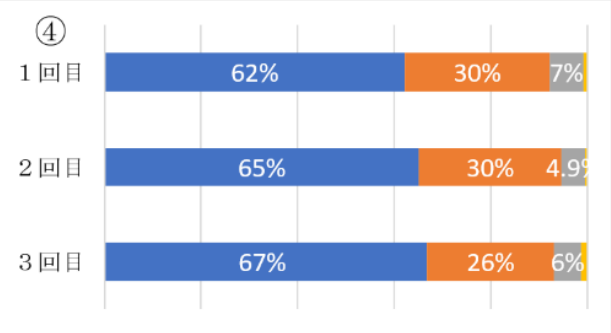
- とてもそう思う
- そう思う
- あまり思わない
- まったく思わない

【調査結果】（青葉小学校の全児童の回答の割合）









5

令和5年度「学業指導応援チーム派遣事業」の実施校における取組
益子町立七井中学校　全学年（第1学年～第3学年）

生徒の主体性を育むため、学校行事や生徒会活動を活性化させた取組

1　取組の概要

学校行事や生徒会主催の行事等とコラボレーションして、生徒と教師、生徒同士の関係を築くことができるようにする。生徒が主体的に活動する場を設け、自己肯定感を高められるような活動を増やしていく。

（1）生徒の現状等

○ 大変仲がよく、落ち着いて生活している。
○ 人前に出て、積極的に活動するのが苦手である。
○ 不登校生徒が増えている。

（2）期待する生徒の姿

○ 互いの良さを認め合える生徒（1 年）
○ さわやかな生徒（2 年）
○ 自立した生徒（3 年）

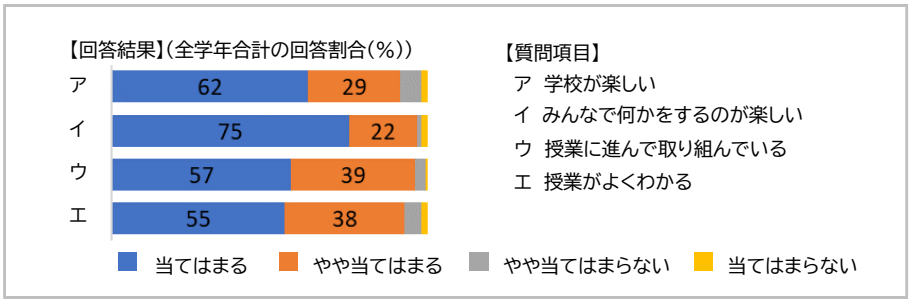
（3）主な取組

○ 学校行事とのコラボレーション
○ 生徒会活動とのコラボレーション
○ 各学年の取組により、学校全体に普及する

2　PDCA サイクルで進めた取組

PDCA サイクル
P　D　C　A/P　D　C　A/P　D　C　A/P　D

P（計画）5月　生徒の意識を把握（アンケート調査の実施）



■ **校内研修会で、アンケート調査の結果を基に学年ごとに話し合った。**

○ 全体的には「肯定的な意見」の割合が高い。

課題・目標を設定

○ 学校行事を増やしたり、生徒会と連携したりすることを考えて、「ア　学校が楽しい」「イ　みんなで何かをするのは楽しい」に注目する。
○ 集団づくりに注目し、それが学習の方にもつながるとよい。

具体的な取組を検討

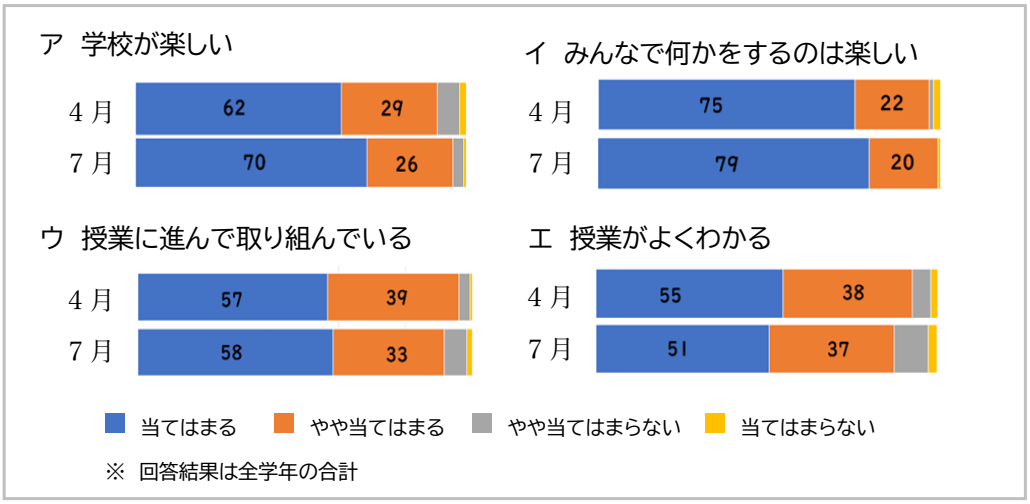
＜1年＞　先生方からプラスの声かけを意識的に増やし、賞賛し、よいところを認めるようにする。
＜2年＞　場面ごとに適切な行動を考えさせ、よい行いをしている人を認め、感謝する。
＜3年＞　卒業を視野に入れて、自分で考えて行動できるように支援し、基本的なことができるようにする。

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

D（実行） 5月～7月　具体的な取組の実施

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

C（点検） 7月　アンケート調査等の結果の分析、取組の点検・見直し



■ 校内研修会で、アンケート調査の結果を基に学年ごとに話し合った。

【アンケート調査の結果から】

○「ア　学校が楽しい」「イ　みんなで何かをするのは楽しい」が増えたのは、学校行事等があったからではないか。
○「どちらかと言えば」をどうすれば、「あてはまる」になっていくのか考える必要がある。

【先生方の感じたこと】

○ どうすべきかを生徒に問いかける機会が増えた。
○ 生徒に任せる機会が増えた。
○ 教師同士のコミュニケーションを図ることができた。

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

A/P（修正/計画） 7月　目標や取組の修正、取組の方向性の共有

○ 現実を見せて、社会の厳しさを意識させつつ、できたこと、意欲を褒めて、認めて、自信を育てる。
○「できた」の一歩を見逃さない。
○「やろう」とした気持ちを認める。
○ 自分で学習に向かえる生徒を増やす。 →個に応じたサポート。
○ 話合い活動を増やして、生徒同士をつなげていく。
○ 正解のない問いは、グループで話合いをし、正解のある問いは個人で考える。

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

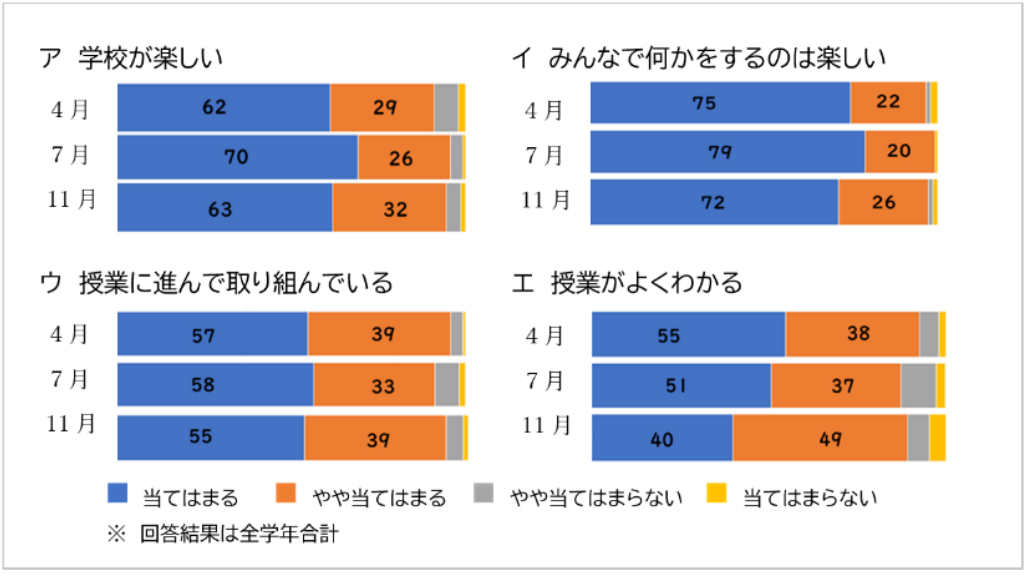
D（実行） ８月～12月　**具体的な取組の実施**

学校行事や生徒会とのコラボレーション

○ 生徒会主催「ふれあい活動」の実施（月１回程度）
　・ クラス対抗、縦割り班などで、レクレーション（全校おにごっこ、巨大カルタ、ドッチビー大会など）
○ 学校行事「スポーツフェスティバル」（学期１回、年間３回）
　・ 大縄、縄跳び大会、ドッジボールなど
　※ 縦割り班の時は、練習しなくてもできるような種目を実施
○ 先生方も参加しながら、生徒と関係づくり、声かけを実施

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

C（点検） 12 月　**アンケート調査の結果等の分析、取組の点検・見直し**



■ 校内研修会で、アンケート調査の結果を基に学年ごとに話し合った。

【アンケート調査の結果から】

○ なかなか、思い通りにアンケート結果がよくなってはいかない。
○ 学校行事があったことで、７月は「ア　学校が楽しい」「イ　みんなで何かをするのは楽しい」で肯定的回答が増えているが、11 月は行事も終わってしまったのでやや下がったのではないか。
○ 「イ　みんなで何かをするのは楽しい」は行事を通して、友達ともめたり、話合いをしたりという経験をして、楽しいだけではないと感じたのではないか。
○ 「エ　授業がよく分かる」に関しては、内容が難しくなったためではないか。
○ １年生に関しては、入学したばかりはお客さんだったけど、自分たちでやることで楽しさも大変さも感じているのではないか。
○ 「イ　みんなで何かをするのは楽しい」の肯定的な意見が 98％というのは、七井中の強みである。

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

A/P（修正・計画）　D（実行）　C（点検）　A/P（修正・計画）　D（実行）・・・　**サイクルの継続・・・**

3 成果

○ 生徒について

- 自主的に活動する場面が多くなった。
- 楽しそうに活動に取り組む様子が見られた。
- 生徒と先生方が話をする機会が多くなった。
- 上級生を中心に、自分たちで進めていくことに楽しみを感じているようだ。
- 学習への取組も変わってきたように感じる。

○ 教職員について

- 生徒への認める声かけをすることが多くなった。
- 先生方と生徒のことについて話をする機会が増えた。
- 学年の先生方や他の先生方と、生徒のことについてじっくりと話をする機会を設けることができた。
- 先生方がお互いに励まし合いながらがんばることができた。
- 学校全体がチーム（組織）として、生徒のために活動することができた。
- 生徒の意見や気持ちを聞く、よい機会となった。
- 職員室の風通しが良くなり、職員室が明るい雰囲気になった。

【校内研修会の様子】 協議では、各学年の若手の先生が司会を担当しながら、明るい雰囲気の中で活発な意見交換がされていた。

4 今後の取組

○ できない自分が恥ずかしい → できるようになる → 自信がつく
という流れを大切にしていきたい。

○ 楽しくないことでも逃げずに、乗り越えていけるよう支援する。

○ 自分から何かしようとする気持ちが出てきたので、その気持ちを大切にしていきたい。

○ 生徒自身が受け身ではなく、自分たちで作っていく意識を育てたい。

○ 楽しいだけではなく、しっかりやるときと楽しむときのメリハリを付けるよう支援していきたい。

6

令和5年度「学業指導応援チーム派遣事業」の実施校における取組
下野市立国分寺中学校　全学年（第1学年～第3学年）

教科指導における「集団づくり」と「授業づくり」について、学年部会と教科部会で協議し実践した取組

1　取組の概要

生徒の自己有用感や自尊感情を高め、学校教育目標の実現に迫れるよう、教科指導から「学びに向かう集団づくり」と「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」の取組を実施した。

（1）生徒の現状等

○　男女仲良く、協力して活動できる生徒が多い。学校全体として落ち着いて生活できている。
○　縦割りの学校行事や生徒主体の活動が多く、上級生から下級生へよき伝統が引き継がれている。
○　学習習慣の確立が難しく、個別に支援を要する生徒もいる。

（2）　期待する生徒の姿

○　意欲をもち　自主的に学習する生徒
○　人と郷土を愛し　進んで奉仕する生徒
○　健康で　はつらつとした生徒

（3）　主な取組

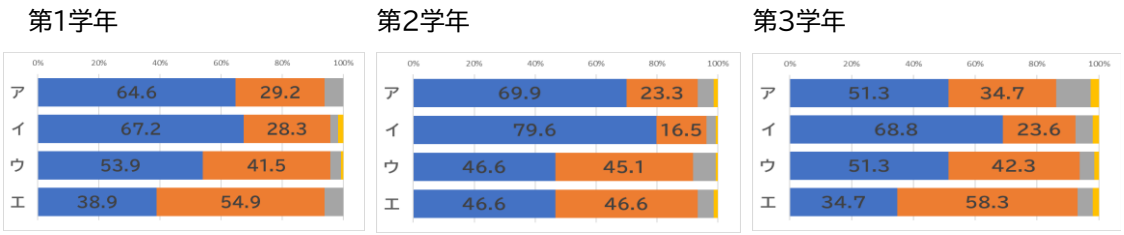
○　教科指導等の場面での教師の意図的な働きかけ

2　PDCA サイクルで進めた取組

PDCA サイクル
P　D　C　A/P　D　C　A/P　D　C　A/P　D

P（計画）　5月　**生徒の意識を把握（アンケート調査の実施）**

【回答結果】（回答割合（%））



【質問項目】
ア　学校が楽しい
イ　みんなで何かをするのが楽しい
ウ　授業に進んで取り組んでいる
エ　授業がよくわかる

【回答内容】
当てはまる
やや当てはまる
やや当てはまらない
当てはまらない

■　校内研修会で、アンケート調査の結果を基に学年ごとに話し合った。

【アンケート調査について】

「ア　学校が楽しい」、「イ　みんなで何かをするのは楽しい」の肯定的回答の割合が高いのは、縦割り活動や生徒主体の活動が多い本校の取組の成果と考えられる。

課題・目標を設定

○　どの学年も「エ　授業がよくわかる」の肯定的回答の割合が他の質問項目に比べて低いことから、それぞれの学年が「エ　授業がよくわかる」に注目する。
○　授業づくりは教科の専門性が関係することから、「授業がよくわかる」ための教師の具体的な働きかけを教科部会で研究し、授業の中で実践していく。

具体的な取組を検討

■ 各教科部会で、「授業がよくわかる」ようにするための働きかけや具体的な取組を検討した。

【各教科における実践】

全ての学年の授業において、教科ごとに以下の取組を共通実践することとした。

教 科	働きかけ、具体的な取組
国 語	・ 言葉を楽しむ経験を多くさせ、想像力や表現力の向上につなげる。 ・ 体験を経て、表現させる。
社 会	・ 興味・関心を引く手立ての工夫。 ・ 身近なものを関連させる。 ・ 発問の工夫「なぜ」により根本的な理解につなげる。
数 学	・ グループ内の協働を多くする。 ・ 称賛の機会を意図的に増やす（意図的に見る）。 ・ 教師による意図的配置の工夫。
理 科	・ 振り返りシートの活用（教師、生徒双方の指導に生かす評価の充実）。 ・ 視覚的な理解を助ける工夫。 ・ 課題を自分で設定させる。
英 語	・ ペア学習、グループ学習の工夫。 ・ 4技能統合型の活動を増やす。 ・ 前時の振り返りから授業をスタートする。
音美技家	・ 日常生活と関連付け、身近に捉えられるように、課題設定を工夫する。
保健体育	・ 男女共習、グルーピングの工夫。 ・ 生徒同士教え合う、学び合う。 ・ スモールステップの称賛を心がける。 ・ 視覚情報を助ける端末の活用。

PDCA サイクル

P D C A/P D C A/P D C A/P D

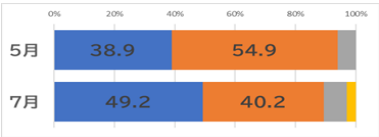
D（実行） 5月～7月 **具体的な取組の実施**

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

C（点検）７月　**アンケート調査の結果等の分析、取組の点検・見直し**

エ　授業がよくわかる

第1学年



第2学年

第3学年

当てはまる　やや当てはまる　やや当てはまらない　当てはまらない

【各教科部会での実践の分析】

■　「授業がよくわかる」ようにするための実践の成果と課題を各教科部会で話し合った。

教　科	働きかけ、具体的な取組	取組の主な成果（〇）と課題（◇）
国　語	・言葉を楽しむ経験を多くさせ、想像力や表現力の向上につなげる。 ・体験を経て、表現させる。	〇　話合いの進め方の指導が意見の深まりにつながった。 ◇　ICT端末の使用により、経験を動画や画像で補い、理解を深める。
社　会	・興味・関心を引く手立ての工夫。 ・身近なものを関連させる。 ・発問の工夫「なぜ」根本的な理解を。	〇　自己認識（何が分からないか）ができるようになってきた。 ◇　アウトプットの場面を増やし、活動を振り返らせる機会を充実させる。
数　学	・グループ内の協働を多くする。 ・称賛の機会を意図的に増やす。 ・教師による意図的配置の工夫。	〇　グループ内の協働場面を意図的に取り入れた。 ◇　協働の成果を学級全体で共有し、一人一人の活躍を認める。
理　科	・振り返りシートの活用（教師、生徒双方の指導に生かす評価の充実）。 ・視覚的な理解を助ける工夫。 ・課題を自分で設定させる。	〇　振り返りの仕方を工夫し、指導に生かす評価の充実につなげられた。 ◇　メタ認知の機会を充実させ、より主体的な学びに活かす。
英　語	・ペア学習、グループ学習の工夫。 ・4技能統合型の活動を増やす。 ・前時の振り返りから授業スタート。	〇　単元の目標に対する自分の学びを確認し、主体的な学びにつなげた。 ◇　説明、指示を短く簡潔にすることで、生徒の理解を助ける工夫。
音美技家	・日常生活と関連付け、身近に捉えられるように、課題設定を工夫する。	〇　日常生活と関連付ける指導の工夫。 ◇　ねらいと振り返りの視点を分かりやすい言葉で示すことで、生徒がメタ認知しやすくなる働きかけ。
保健体育	・男女共習、グルーピングの工夫。 ・生徒同士教え合う、学び合う。 ・スモールステップの称賛。 ・視覚情報を助ける端末の活用。	〇　生徒同士の学び合いを増やすことで頑張りを認める機会が増えた。 ◇　ICT端末の活用やグルーピングをより意図的に工夫し、生徒の活動や理解を深める。

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

A/P（修正/計画） ７月　目標や取組の修正、方向性の共有

【各学年部会での協議】

■　各学年部会において、各教科での成果と課題を共有した。さらに、それぞれの教科で効果的であったと思われる働きかけについて、他の教科等の指導の場面でどう生かせるかを協議した。協議をしていく中で、教科等横断的な視点での働きかけや具体的な取組についての話題が多くなり、どの教科の授業でも、どの先生の授業でも同じように働きかけていこうとする方向にまとまっていった。

各学年での働きかけや具体的な取組は以下のとおり。

【各学年の実践】「授業がよくわかる」ようにするための働きかけや具体的な取組

学　年	働きかけ、具体的な取組
《第1学年》	○　生徒が自分達で考えて活動できる場面を増やす。 ○　授業が分からない生徒が「分からない」と言える雰囲気をつくる。 （「分からない」と言えることは素晴らしいことであるという価値付け）
《第2学年》	○　振り返りシートの工夫。ねらいと振り返りの整合性を図れるような指導する。 ○　指示を短く、明確に分かりやすくする。 ○　生徒の活動や言動を「ほめる」「認める」場を意図的に設定する。 ○　グループ活動が停滞しないよう、人間関係等に配慮してメンバーを調整する。
《第3学年》	○　授業のゴールを生徒にとって分かりやすいものにする。 ○　振り返りを次につなげられるよう、生徒の言葉を生かして共有する。 ○　協働の学習の充実。生徒同士で教え合い、学習が苦手な生徒が前向きに取り組めるようにする。 ○　学習や題材のテーマを生徒に設定させ、自己決定の場を多くする。

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

D（実行） ７月～1月　具体的な取組の実施

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

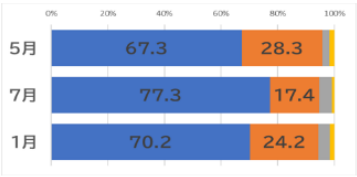
C（点検） 1月　アンケート調査の結果等の分析、取組の点検・見直し

■ 校内研修会で、学年ごとに実践の成果等を話し合った。

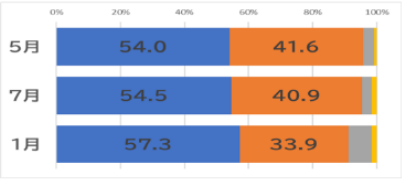
第1学年

ア　学校が楽しい

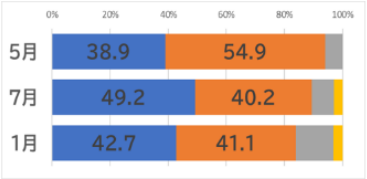
イ　みんなで何かをするのは楽しい



ウ　授業に進んで取り組んでいる



エ　授業がよくわかる



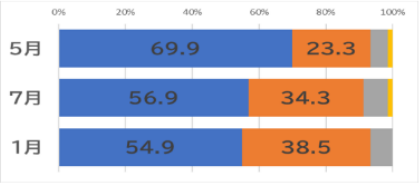
当てはまる　やや当てはまる　やや当てはまらない　当てはまらない

【アンケート調査結果の分析】

○　学習内容が難しくなってきているが、どの生徒もよく頑張っている。
○　「ウ　授業に進んで取り組んでいる」の「当てはまる」が増えているのが特徴的。教師側の意図的な働きかけもあり、「分からない」「教えて」と言える雰囲気がしっかりと醸成されていることが奏功しているのではないか。
○　学校として「学びの共同体」の取組を共有していることも成果の一因と考える。

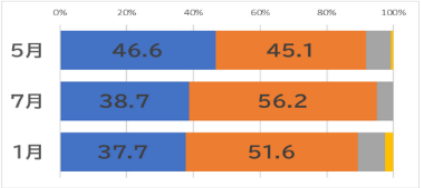
第2学年

ア　学校が楽しい

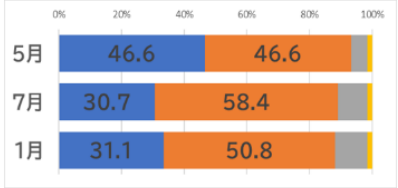


イ　みんなで何かをするのは楽しい

ウ　授業に進んで取り組んでいる



エ　授業がよくわかる



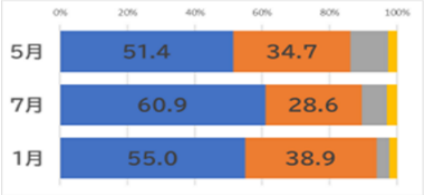
当てはまる　やや当てはまる　やや当てはまらない　当てはまらない

【アンケート調査結果の分析】

○　「エ　授業がよくわかる」について難易度が上がっている中で、「当てはまる」「やや当てはまる」の割合の合計が約8割であるのは、良い傾向ではないか。
○　「ア　学校が楽しい」と、「イ　みんなで何かをやるのは楽しい」で「当てはまらない」が「0」になったのは素晴らしいことである。「エ　授業がよくわかる」ために意図的に働きかけていることで、他の項目にも良い影響を及ぼしている。
○　学習習慣が定着しておらず、嫌なことを避ける傾向がある生徒をどう学習に向かわせるかが課題。学びに向かう集団づくりの中で、個に応じた支援や関わりも工夫していく必要がある。

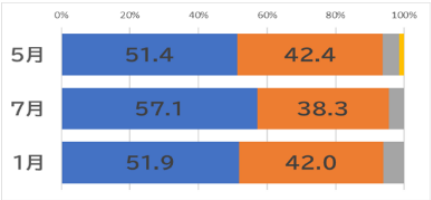
第3学年

ア　学校が楽しい

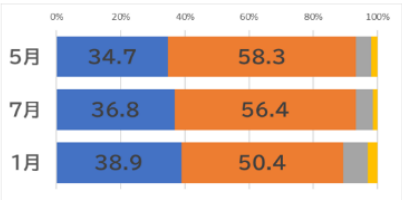


イ　みんなで何かをするのは楽しい

ウ　授業に進んで取り組んでいる



エ　授業がよくわかる



当てはまる　やや当てはまる　やや当てはまらない　当てはまらない

【アンケート調査結果の分析】

○　アンケート実施時期が私立高校の受験後だったため、結果に影響があったことも考えられる。
○「エ　授業がよくわかる」の否定的回答の割合が増加したことについては、受験科目の学習の中で、個別にワークシート等に向き合う機会も増えたので、困難を感じる生徒もいたのではないか。
○　第3学年としての取組の3つ目「協働学習の充実」については、生徒同士の話合いや生徒の取組を肯定する声かけを意図的にできたのではないか。

P　D　C　A/P　D　C　A/P　D　C　A/P　D

A/P（修正/計画）1月　**目標や取組の修正、取組の方向性の共有**

【各学年での実践】「授業がよくわかる」ようにするための働きかけや具体的な取組

学　年	働きかけ、具体的な取組	取組の修正、追加等
《第1学年》	○　生徒が自分達で考えて活動できる場面を増やす。 ○　授業が分からない生徒が「分からない」と言える雰囲気をつくる。	○　生徒一人一人を褒める機会をもっと増やす（生徒理解を深める）。 ○　生徒自身に気付かせ、考えさせる工夫をしていきたい。
《第2学年》	○　ねらいと振り返りの整合性を図れるような指導。 ○　指示を短く分かりやすくする。 ○「認める」場を意図的に設定する。	○　居心地のよい学級づくりや生徒の自己肯定感を高めるような取組の工夫。 ○　学習の基礎基本、提出物の期限を守ることなどを再徹底する。
《第3学年》	○　授業のゴールを分かりやすくする。 ○　振り返りを次につなげられるよう、生徒の言葉を生かして共有する。 ○　学習が苦手な生徒が前向きに取り組めるよう、協働学習の充実。 ○　学習の中で自己決定の場を多くする。	○　授業の中で、生徒が自分で目標を決められるようにする。 ○　意図的に教え合いの場面を取り入れ、生徒主体の展開にする。 ○　個々の頑張りを認める言葉がけを意識して行う。

PDCA サイクル

P D C A/P D C A/P D C A/P D

D（実行） ⇒ C（点検） ⇒ A/P（修正・計画） ⇒ D（実行）・・・ サイクルの継続・・・

3 成果

○ 生徒について

・ 教職員と生徒の関係性が良好で、また学級の集団づくりや異年齢集団での活動の充実により、安全・安心な風土の醸成がなされている。そうした安心感のある学校や学級の中で、生徒は学習や行事に前向きに取り組んでいる。

・ 「イ みんなで何かをするのは楽しい」の肯定的回答の割合が高いという本校の特色ある環境の中で、生徒は集団で学ぶよさや協働する大切さをより実感し、それがウ、エの授業に関する意識の変容にもつながっていると考えられる。「意欲をもち 自主的に学習する生徒」の実現に向けて、生徒は着実に成長している。

・ 各教科等での教職員の意図的な働きかけは、生徒の自己有用感や自尊感情を高めることにつながっていると考えられる。生徒は学級にとどまらず、学校行事や委員会活動、部活動などでも、生徒主体で活動できている。

【生徒の様子】

《秋輝祭・生徒会主催のイベントの様子》
生徒会が主体となって企画・運営し、活気ある活動となりました。

《運動会》
学級旗を作成し、作戦会議なども行いながら各学級の団結力を深めました。

《11 月・いじめ防止強調月間》
クラスでいじめをなくすためにはどうしたらよいかを話し合っています。（6月に一人一人が自分のいじめゼロ宣言を書いて掲示したものをもとに、11 月には振り返りを行いました。）

《3月・下野市姉妹都市交流》
ドイツの生徒に日本文化を一生懸命教える姿が見られました。一日学校で生活をともに送り、友好を深めました。

○ 教職員について

・ 同僚性が高い教師集団を基盤として、目指す生徒像の実現に向けて具体的な働きかけについて話し合い、共有することができた。

・ 教科部会で話し合った実践をもとに成果や課題を各学年で共有したことで、教科等横断的な視点で取組を考えていくことの大切さに意識が向いた。話合いの過程で、目指す生徒像の実現に向けて、教職員は方向性をそろえて組織的かつ意図的に働きかけることの意義をより深く実感できた。

・ 生徒の声を基に生徒指導の成果と課題を検証し、改善につなげることで、目標と指導と評価の一体化の意識が高まった。

・ 教科ごとや学年ごとなど、話合いの形態を目的に応じて工夫したことで、学業指導について様々な方向性から実態を捉えることにつながった。

4 今後の取組

○ 本事業をとおして、改めて学習の基盤となる集団づくりや授業づくりの大切さが分かった。

○ 教職員がその取組を全員で協議し、見直していく時間を設けることで、自校の生徒指導について組織的に検証し、改善につなげることができた。

○ 本事業で改めて考えることができた学業指導について、職員で理解を深め、今後もこうした実践を続けていきたい。

7 令和6年度「学業指導応援チーム派遣事業」の実施校における取組
那須塩原市立黒磯中学校　全学年（第1学年～第3学年）

生徒が主体的に取り組むための授業改善と生徒の所属感を高める活動の工夫

1　取組の概要

生徒一人一人が大切にされ、安心して学校生活を送ることができるよう、生徒の意識を把握しながら取組の点検や修正を行い、「学びに向かう集団づくり」と「生徒が意欲的に取り組む授業づくり」の充実を目指した。

（1）生徒の現状等

- ○ 行事に一生懸命取り組む生徒が多く、様々な活動を通して生徒同士の絆を深めている。
- ○ 落ち着いて授業に向かえるよう、基本的なルールの定着に取り組んでいる。
- ○ 不登校の生徒が多い。

（2）生徒に期待する姿

- ○ 自ら学習に取り組み、粘り強く努力し、人と人とのつながりを大事にする生徒（1年）
- ○ 一人一人が心と身体の成長を遂げ、尊敬される先輩を目指す生徒（2年）
- ○ 結束・決意・感謝の思いを深め、自立へ向かう一年を作っていく生徒（3年）

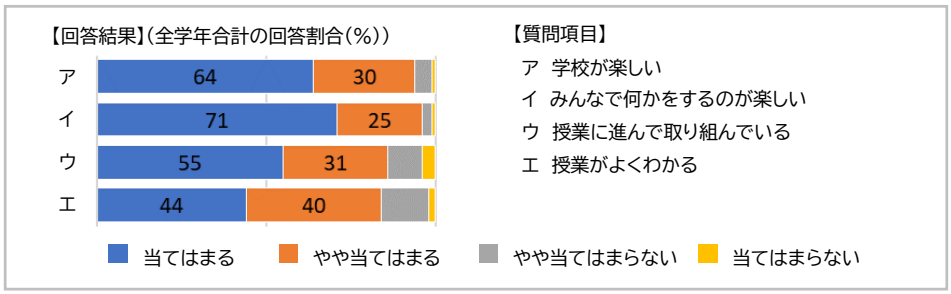
（3）主な取組

- ○ 教師主導の授業ではなく、生徒が進んで取り組むことができるようなワクワクドキドキする授業への転換を図る。
- ○ 生徒の所属感を高めるため、学校行事や学年・学級での活動の際に、一人一人が役割をもてるよう手立てを講ずる。

2　PDCA サイクルで進めた取組

PDCA サイクル　P　D　C　A/P　D　C　A/P　D　C　A/P　D

P（計画）5月　**生徒の意識を把握（アンケート調査の実施）**



■ **校内研修会で、アンケート調査の結果を基に、学年の生徒の状況や今後の取組等について話し合った。**

課題・目標を設定

1年 ：「ウ　授業に進んで取り組んでいる」の割合が低いので、ワクワクドキドキするような授業へ改善を行う。

2年 ：「ア　学校が楽しい」の肯定的な回答の割合が低い。何事にも積極的に取り組めない現状があるため、一日の振り返りを重視する。

3年 ： 規範意識やルール遵守について課題が見られる。安全・安心な生活を意識させた上で「学びに向かう集団作り」に取り組んでいく。

具体的な取組を検討

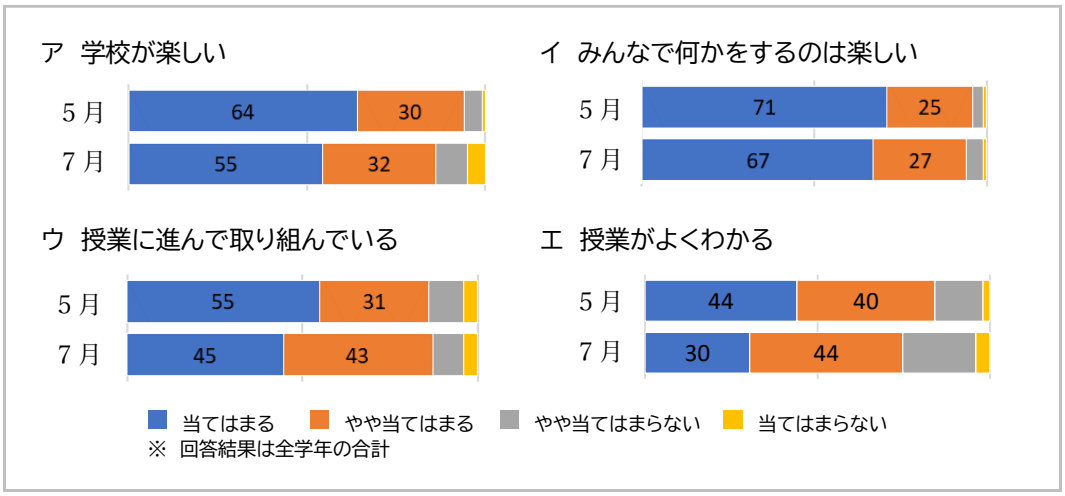
1年 ： 話合いの場の設定(誰、時間)を細かく設定する。
多様な見方や考え方がでることにより学習活動がより深いものになることを実感させる。
2年 ： 帰りの会等で一日の振り返りを行わせ、積極的に取り組めた生徒を称賛する場面を作る。
授業中、話合い活動を多く取り入れ、生徒相互に教え会う場面を増やす。
3年 ： めあての確認と振り返りの徹底を行うことで、授業で分かったことやできるようになったことを自覚させる。
教師、生徒に限らず他人の話を最後まで聞くことを習慣化する。

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

D(実行) 5月～7月 **具体的な取組の実施**

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

C(点検) 7月 **アンケート調査等の結果の分析、取組の点検・見直し**



■ **校内研修会で、アンケート調査の結果を基に、学年の生徒の状況や今後の取組等について話し合った。**

1年 ： 全体的に「当てはまる」の割合が減っている。特に、「エ 授業がよくわかる」における「当てはまる」の割合が減っている。しかし、「どちらかといえば当てはまる」の割合が増え、肯定的に捉えている生徒は増えた。
2年 ：「授業づくり」の項目に対し、否定的に捉えている生徒が増えている。不登校傾向の生徒が教室に入れるようになり、学習に対し、不安をもっている生徒がいるのかもしれないと分析する。
3年 ：「ウ 授業に進んで取り組んでいる」における「当てはまる」の割合が下がっているが、「どちらかというと当てはまる」の割合を含めると上がってきている。教科によってはつまずきやすい教科や分野もあるので、指導を工夫しながら継続していく。

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

A/P(修正/計画) 7月 **目標や取組の修正、取組の方向性の共有**

1年 ： 学級や学年において、みんなで取り組むことが楽しいという実感をもてる活動(レクリエーション、ソーシャルスキルトレーニング)を増やしていく。
2年 ： 学校生活が「楽しい」という割合を増やしていくため、学年でのレクリエーションや朝の会や学級活動でのエンカウンターを増やし、学年集団のつながりを深めていく。
3年 ：「みんなで何かをするのは楽しい」という生徒の気持ちを指導に生かし、「授業に進んで取り組める」ような指導を継続し、「授業がよく分かる」のサイクルを意識した計画を立てる。

PDCA サイクル

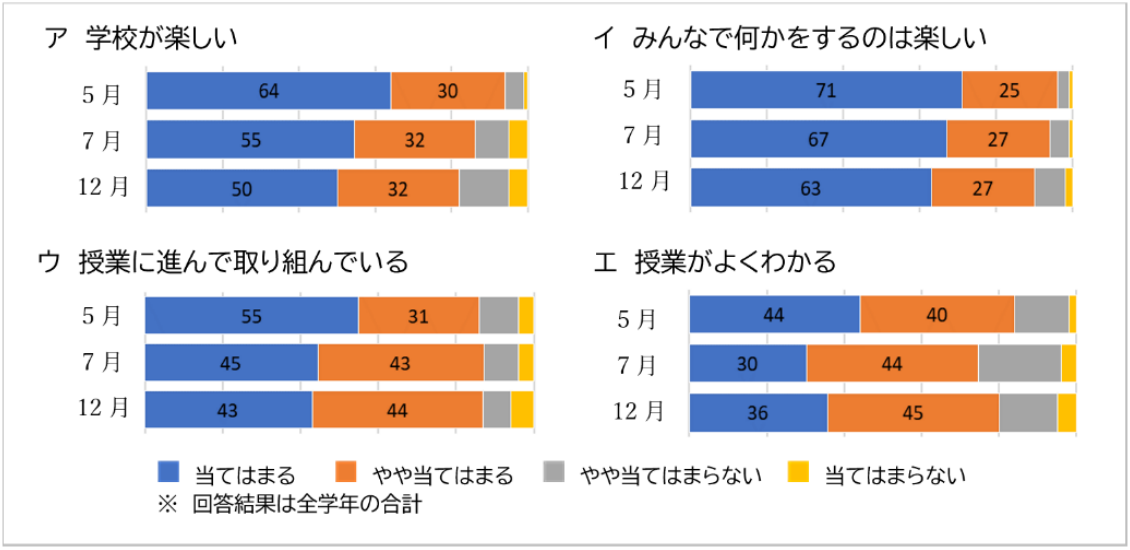
P D C A/P D C A/P D C A/P D

D(実行) 8月～12月 　**具体的な取組の実施**

PDCA サイクル

P D C A/P D C A/P D C A/P D

C(点検) 12月 　**アンケート調査の結果等の分析、取組の点検・見直し**



■ **アンケート調査の結果を基に、学年で取組の成果や生徒の状況等について話し合った。**

○ 1、2年生は、「学校が楽しい」の「当てはまる」の割合が減った。アンケート直前に行われた学校行事(長距離走)が影響したように感じる。

○ 「授業に進んで取り組んでいる」の「当てはまる」の割合が減っている。そのために、教師主導の授業ではなく、生徒が中心となる主体的で対話的な学びを意識した授業改善に取り組む。

○ 3年生は、全ての項目で「当てはまる」の割合が上がった。部活動を引退し、学習に進んで取り組む生徒が増えたことも要因と考えられる。また、学び合いの学習を積極的に取り入れたことや総合的な学習の時間において、生徒主体の活動を取り入れたことが自信につながっているのではないかと感じる。

PDCA サイクル

P D C A/P D C A/P D C A/P D

A/P(修正・計画) D(実行) C(点検) A/P(修正・計画) D(実行)・・・ 　**サイクルの継続・・・**

3 成果

○ 学年ごとに指導の方向を合わせ、確認しながら進めてきたので、年度当初に比べて生徒が落ち着いて授業に取り組めるようになった。

○ 目標として掲げていた数値には到達できなかったが、目標を達成するために各学年において真剣に対応策を検討することができた。

○ 休みがちであった生徒が、少しずつ登校日数を増やし、行事等に参加できた。

○ 各教科で「みんなで何かをするのは楽しい」という学年の特色を生かした取組を行ってきたことで「授業に進んで取り組んでいる」や「学校が楽しい」の項目で伸びが見られた学年があった。

【先生方の協議の様子】

○ 学年ごとに分かれ、アンケート結果を分析し、目標や取組を修正しながら全体で共通理解を図った。

【生徒の様子】

《体育祭》 チーム一丸となって競技や応援に取り組み生徒同士の絆を深めることができました。	《全校集会（人権集会）》 全校生徒前で自分の考えを述べる機会を設けています。	《生徒会主催行事》 生徒が企画・運営に当たりました。

【授業の様子】

○ グループ活動を通して、友達と共に考え、学び、新しい発見や豊かな発想が生まれる授業を目指している。グループ活動をする際は、ねらいを明確にもち、それを生徒にわかりやすく提示するようにしている。

4 今後の取組

○ この取組を1年で終わらせることなく、来年度も継続していく。

○ 具体的には本年度と同様、年に数回アンケートを実施し、その結果をもとに対策を検討する機会を設ける。

8

令和5年度「学業指導応援チーム派遣事業」の実施校における取組
栃木県立宇都宮南高等学校　第１学年

日頃の取組を見直しながら、学習習慣の定着を図った取組

1　取組のポイント

学習習慣の定着を目標に、前半では、「挨拶の励行」や「教室の整理整頓」などのあたり前にできることの定着を促し、後半では「白手帳を利用した授業の振り返り」を実施した。

（1）生徒の現状等

○　部活動をはじめ、生徒会活動、諸行事等にも前向きに参加している生徒が多い。
○　学年の中には、体調不良等の理由から欠席が目立つ生徒も出ている。
○　大きな問題行動等は見られないが、諸規則（服装、頭髪を含む）や課題等の提出期限を守れない生徒がいる。

（2）期待する生徒の姿

○　基本的な生活態度を身に付けている。
○　主体的な学習習慣が身に付き、進路への関心が高い。
○　学校の諸活動等に積極的に取り組み、集団の一員として進んで貢献できる意識を確立している。

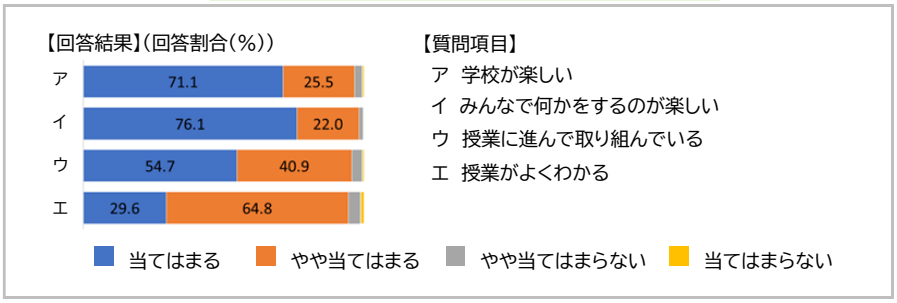
（3）主な取組

○　学びに向かう集団づくりに焦点を当てた取組
・　挨拶の励行、教室等の整理整頓、授業のチャイム開始の徹底
・　白手帳（生徒が各授業の内容等を記入するもの）を活用した授業の振り返り

2　PDCA サイクルで進めた取組

PDCA サイクル
P　D　C　A/P　D　C　A/P　D　C　A/P　D

P（計画）５月　**生徒の意識の把握（アンケート調査を実施）**



■　**アンケート調査の結果を基に、学年会で生徒の状況及び今後の取組等について話し合った。**

課題・目標を設定

○　この時期は、学習習慣の確立を目標に、集団づくりを大切に考えていきたい。
○　学びに向かう集団づくりから、授業づくりにつなげていきたい。
○　授業づくりは、学校生活の大部分の時間であるため、充実した学校生活を送る上では、大切な時間である。
○　授業は、まず授業がわかることが必要である。授業に参加し、授業の内容が理解できることで、学校生活の活力になると考えられる。

具体的な取組を検討

○「学びに向かう集団」になるよう、生徒の基本的な生活態度の育成を目指し、以下の取組を学年全体の取組として進める。
・　挨拶の励行
・　教室等の整理整頓
・　授業のチャイム開始の徹底

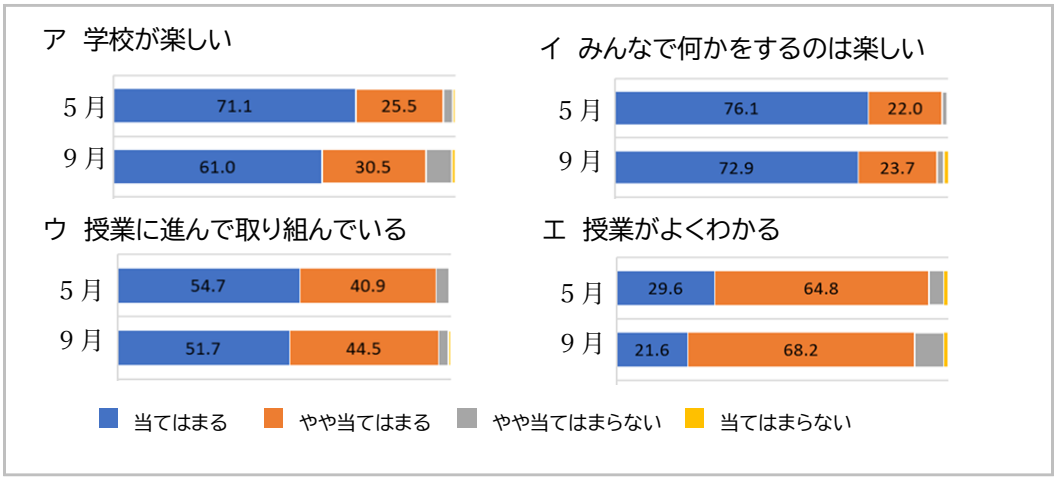
PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

D（実行） 5～9月　具体的な取組の実施

※ 挨拶の励行、授業チャイムの徹底については、教員が進んで行うことにより生徒の行動につなげることを意識した。
※ 生徒ができていたらほめることを教員が意識して取り組んだ。

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

C（点検） 9月　アンケート調査等の結果の分析、取組の点検・見直し



■ アンケート調査の結果を基に、学年会で生徒の状況及び今後の取組等について話し合った。

○ アンケート結果は、ほとんど変化はなかった。
○ 「当てはまる」の割合が減少しているが、1年生2学期のスタート時点としては、維持できているという見方もできる。
○ 2回目のアンケートでも「イ みんなで何かをするのは楽しい」の質問に「当てはまる」と答えた生徒が多いのには驚いた。
○ 「エ 授業がよくわかる」の質問で「当てはまる」の割合が低い割に、「ウ 授業に進んで取り組んでいる」の質問で「当てはまる」と回答した生徒が多い。

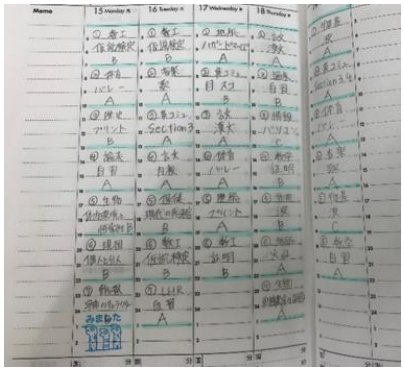
目標や取組の修正

○ 授業に進んで取り組める生徒をもっと増やしていくことで、授業がよくわかる生徒を増やせるのではないか。
○ 授業に進んで取り組むために、普段から生徒に記入させている白手帳をうまく活用できないか。
○ 「ウ 授業に進んで取り組んでいる」の割合60%以上を目指したい。

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

A/P（修正/計画） 9月　取組の方向性の共有

○ 白手帳に毎時間の授業の振り返りを記入する。
〔記入すること〕
Ⅰ 教科名
Ⅱ 本時で学んだこと
（本時の話や見出しなど）
Ⅲ 本時の自己評価（ABC で）
※ 担任は適宜白手帳を確認しアドバイスする。



実際に生徒が記入した白手帳

PDCA サイクル

P D C A/P D C A/P D C A/P D

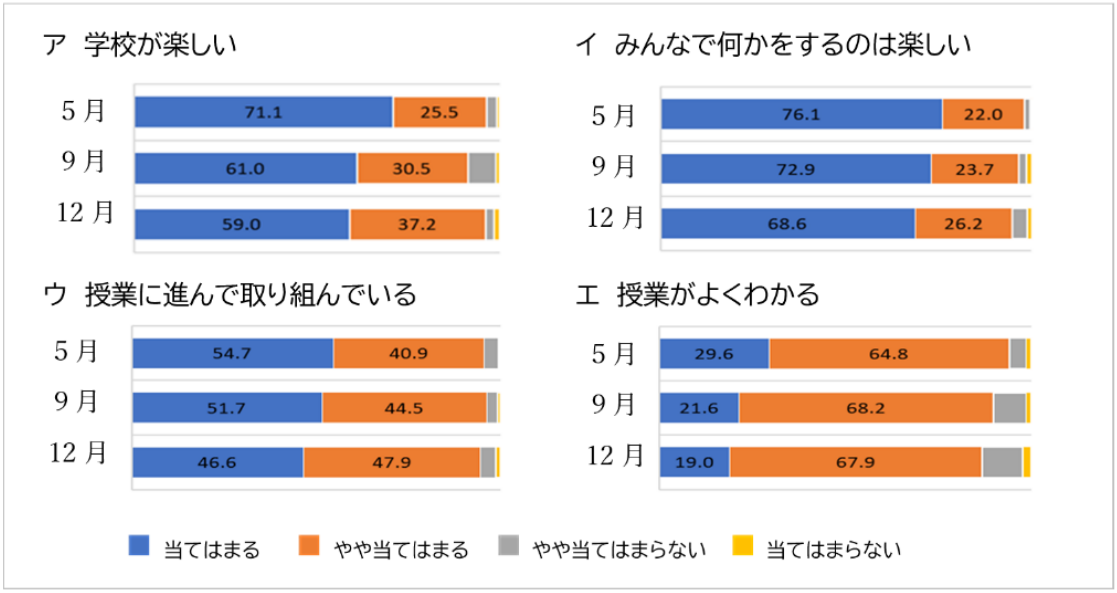
D(実行) 9月～12月　具体的な取組の実施

※ 白手帳に「Ⅱ 本時で学んだこと」を記入する際は単元名だけでなく、授業で学んだ大事な点を書くよう助言した。

PDCA サイクル

P D C A/P D C A/P D C A/P D

C(点検) 12月　アンケート調査の結果等の分析、取組の点検



■ アンケート調査の結果を基に、学年会で取組の成果や生徒の状況等について話し合った。

○ 「ウ 授業に進んで取り組んでいる」のあてはまるは46.6%で、約5%減少した。

○ 期末テスト後のアンケート実施であったことがアンケート結果に影響した。日頃から一生懸命授業を受けていても、テストの結果に結びつかなかったために、「やや当てはまる」と回答した生徒もいる。

○ 白手帳を使いながら、スケジュールや持ち物などについて自己管理ができていたり、自分で立てた目標について振り返りができていたりする生徒もいる。

○ 講演会後の感想を苦にせず記入する生徒が多い。白手帳に授業の要点を考えて記入することに慣れた影響かもしれない。

○ 「ウ 授業に進んで取り組んでいる」の「進んで」の捉え方も生徒間で差があるのではないか。

○ 「当てはまる」はどの質問でも減少したが、生徒の様子を見ると、この学年は前向きに学校生活に取り組む生徒が多く、維持できていると捉えることもできるのではないか。

PDCA サイクル

P D C A/P D C A/P D C A/P D

A/P(修正・計画) D(実行) C(点検) A/P(修正・計画) D(実行)・・・　サイクルの継続・・・

3 成果

○ 生徒について

本校は、部活動等の特別活動に力を入れていることもあり、その両立の中で学習を意欲的に続けていくことは難しい傾向にある。年度当初には、「挨拶の励行」、「教室等の整理整頓」、「授業のチャイム開始の励行」を実施し、学びに向かう集団づくりを目指し、年度途中からは、「白手帳を利用した授業の振り返り」の取組を実施した。「白手帳を利用した授業の振り返り」では、取組の意図を伝えながら振り返りを継続したことにより、生徒の学習への意識があまり低下しなかったように感じている。

○ 教職員について

どうすれば生徒が学習に進んで取り組むようになるかを話し合う時間を数多く持つことができた。普段、教員それぞれが考えていることや、その思いを学年団で共有する時間はあまりとることができない。しかし、本事業を通じて、若い先生からベテランの先生まで、それぞれが自由に発言できる機会が生まれ、1学年団としての集団力・組織力が高まったことが大きな成果と考えている。

4 今後の取組

学業指導応援チーム派遣事業を通じて、PDCAサイクルで取組を行うにあたり、教員間の話し合う機会が増え、教員の集団力・組織力が高まった。今後は本事業の成果を学校全体で共有し、次年度からも、スクール・ポリシー（グラデュエーション・ポリシー）に掲げた生徒の資質・能力を育成できるよう、教職員一丸となって「チーム」として取組を進めていきたい。

9

令和6年度「学業指導応援チーム派遣事業」の実施校における取組
栃木県立小山高等学校　第1学年

個人・集団としての主体的な活動を支援しながら、学び合う集団を目指した取組

1　取組の概要

3年間の目標である「3C」及び１学年の目標を「期待する生徒の姿」とし、生徒の主体性を育む取組やグループ学習や集団活動等の充実を図った。

（1）生徒の現状等

○ 明るく、元気で素直な生徒が多い。
・ 授業中も教員と コミュニケーションが取れ、主体的に取り組む生徒が多い。
○ 得意教科と苦手教科で差がある。
・ すべて満遍なく出来るという生徒が少ない印象。
○ まだ高校生活に慣れていない生徒が多く、部活動との両立や勉強の進度といった中学校とのギャップに悩みを抱えている生徒がいる。
・ 1日の生活リズムを確立し、1日も早い安定した高校生活を確立する。
・ 中学校3年間を with コロナで過ごしてきたことによる柔軟さや経験の無さを埋めていく必要がある。

（2）　期待する生徒の姿

【3年間の目標　3C】
CHANGE 良い習慣に変える　CHALLENGE 新しいことへの挑戦　CREATE 素晴らしい未来の創造
【1学年の目標】
① 時間を守る　② 行事に熱中する　③ いじめを絶対許さない

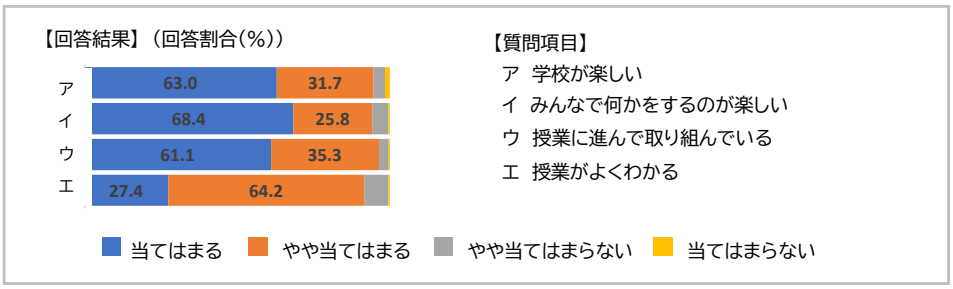
（3）主な取組

○ 生徒の主体性を育む取組
○ グループ学習や集団活動
○ 個人・集団を承認

2　PDCA サイクルで進めた取組

PDCA サイクル
P　D　C　A/P　D　C　A/P　D　C　A/P　D

P（計画）5月　生徒の意識を把握（アンケート調査の実施）



■ アンケート調査の結果を基に、生徒の状況及び今後の取組等について話し合った。

○ 全体的には好印象を持っている生徒が多い。
○ 「ア　学校が楽しい」に「当てはまらない」と回答した生徒の中には、「学校は勉強をしに来る場所であり、楽しさは求めていない」と回答した生徒がいた。
○ 「エ　授業がよくわかる」で「当てはまる」が少ないことについて、 授業担当者との相性の影響があるのではないか 。

課題・目標を設定

４月の入学当初から学年として取り組んでいることを生徒の状況をよく見ながら今後も徹底していく。

具体的な取組を検討

【入学当初からの取組】

① 時間を守る

- 「朝学」を「朝活」に変え、強制ではなく生徒が主体的に学ぶ場を提供する。
- 提出物の期限を守ることや移動教室で遅れないことを徹底する。

② 行事に熱中する

- 学校祭や体育祭における係や役割分担、テーマ・目標設定、運営をできるだけ生徒に任せ、生徒の主体性を育む 。
- 総合的な探究の時間がない数理科学科では、夏の日光探究合宿に向けた指導の中で、探究学習と集団づくりの充実を図る。

③ いじめを絶対許さない

- １学年の目標や「学習 10 箇条」など学年で共通の掲示をする 。
- 教員間で情報共有を密にしつつ、個人だけでなくクラス集団を承認する場面を多くする。

④ 学習計画の立案と振り返りのために ICT 端末を活用する。

- 生徒は学習の計画、記録や振り返りを端末に入力する。担任はコメントやスタンプを入れ、生徒とやり取りをする。

PDCA サイクル

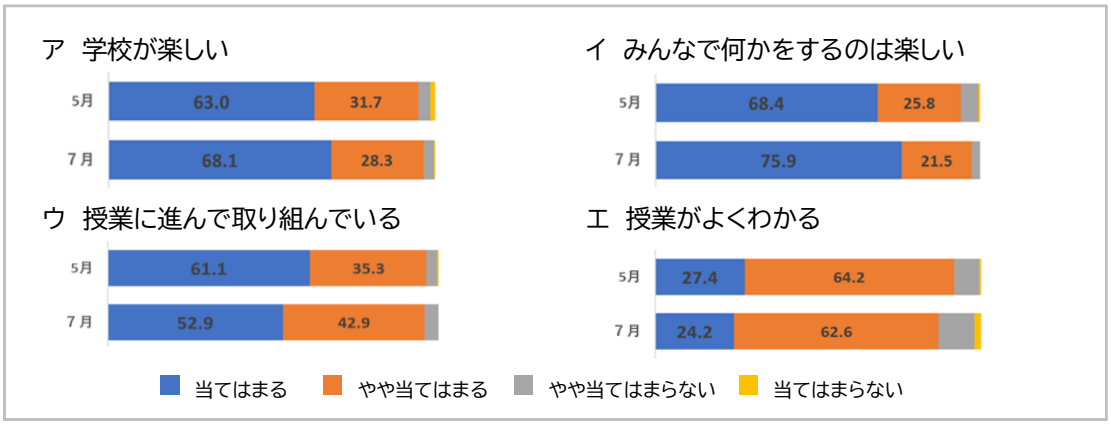
P D C A/P D C A/P D C A/P D

D（実行） 5月～7 月　**具体的な取組の実施**

PDCA サイクル

P D C A/P D C A/P D C A/P D

C（点検） 7月　**アンケート調査等の結果の分析、取組の点検・見直し**



■ **アンケート調査の結果を基に、生徒の状況や今後の取組等について話し合った。**

○ 生徒、保護者から「課題の量が多く終わらない」、「課題に時間が取られ予習ができない」等の声が挙がっている。

○ 生徒が授業、課題等がわからないときに、「わからない」と言えるかが課題でもある。

○ アンケート調査は7月に実施したものであるが、「イ みんなで何かをするのは楽しい」が高い。

○ 8月末の学校祭では、先生達が生徒を見守り、生徒が主体的に活動できた。学校祭以降、進路関係の行事しかないので、学年で体育祭などのレクリエーション系の行事を企画したい。

○ この学年は「先生方みんなが見てくれている」と感じている生徒が多い。

取組の点検・見直し

○ 4月から取り組んでいることを継続しつつ、学年の強みである「イ みんなで何かをするのは楽しい」に注目した取組を実施する。

PDCA サイクル

P D C A/P D C A/P D C A/P D

A/P(修正/計画) 7月 目標や取組の修正、取組の方向性の共有

○ 授業の中で、生徒が「みんなで何かをするのは楽しい」と感じられる活動を実施する。
○ 生徒同士承認の機会を増やす。
○ 「朝活」の取組内容の教科のバランスを考える。
○ 課題の量、教科のバランスを取る。週末課題は週によって変更するなどを検討する。

PDCA サイクル

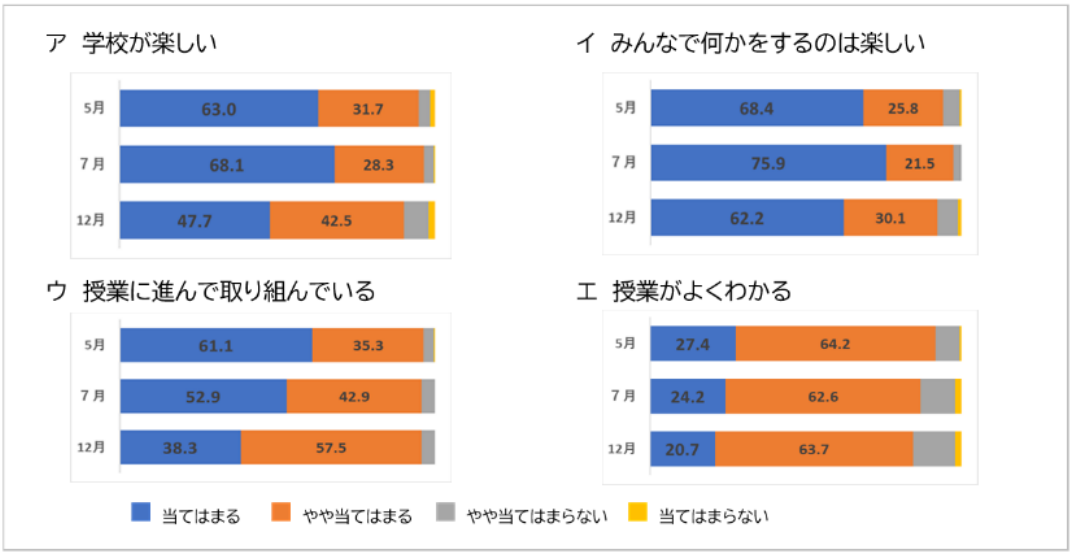
P D C A/P D C A/P D C A/P D

D(実行) 8月～12月 具体的な取組の実施

PDCA サイクル

P D C A/P D C A/P D C A/P D

C(点検) 12月 アンケート調査の結果等の分析、取組の点検・見直し



■ アンケート調査の結果を基に、生徒の状況や今後の取組について話し合った。

○ 「ア 授業がよくわかる」、「イ 授業に進んで取り組んでいる」の割合が減少している。学力の2極化が進んでいる。どうにかして自信を付けさせたい。勉強が苦手と感じている生徒を対象に、冬休みの期間に補習をした方がいいのではないか。

○ 自由意見では「模擬試験が多い」という声があった。模擬試験の数が多く、復習に手が回っていない生徒がいる。

【教員の働きかけについて 】

○ 「イ みんなで何かをするのが楽しい」の割合が高いことから、英語科ではクラス平均を競わせた。生徒同士、声を掛け合いながらモチベーションの高め合い、テストの日も休まないようにして受験している姿があった。

○ 地歴の授業では、グループでの調べ学習に取り組ませると、積極的に協働して学ぶ姿がある。作成したレポートを掲示するなどし、他の生徒も見られるようにしている。

○ ノートを回収して学習状況を把握し、生徒一人一人に対して、丁寧にコメントを書くことで、励まされている生徒がいる。生徒も先生を信頼している。

○ 先生が、自分の担当以外の教科を生徒とともに学ぶ姿は生徒に刺激になるのでないか。担当以外の教科のよいところなどを生徒に伝えることにより学習意欲の喚起につながるのではないか。

○ 自由記述で「行事が少ない」と書いている生徒がいる。そう感じている生徒がいて「イ みんなで何かをするのは楽しい」の割合は減少したのではないか。新しい刺激が必要ではないか。

PDCA サイクル

P D C A/P D C A/P D C A/P D

A/P(修正・計画)　D(実行)　C(点検)　A/P(修正・計画)　D(実行)・・・　サイクルの継続・・・

3 成果

○　「行事に熱中する」ことについては、先生方も生徒と共に積極的に取り組んだ。今までは先生方が指示していたことを、生徒が主体的に互いに助け合いながら行うことができるよう、活動の機会を増やした。結果として、学校行事の準備・片付け等を先生方が指示しなくても行動できる生徒が増えた。

○　意識調査で把握した「集団で何かをすることは楽しい」という学年の強みを意識しながら、授業においてグループ活動など集団で取り組む活動を取り入れた。生徒は、男女分け隔てなくコミュニケーションを取りながら協働学習を進めており、特に、相手の話をきちんと聞く態度や生徒同士が刺激し合って学習する意欲が向上している。

○　意識調査を踏まえ、『新しい刺激を！』を実行するため、12月に教育DXハイスクール推進事業の中で、『未来の教室をイノベーションしよう』をテーマに、3週に渡り、グループで未来の教室を創造した。モデルを設計したり、他の班員にプレゼンテーションをしたりするなどの活動に積極的に参加しながら思考力、判断力、表現力を互いに高め合っていた。

○　放課後に学習室を開放し、クラスの垣根を越え、学年で学習スペースを確保することにより他クラスの生徒同士で教えあう場を設けることができた。

○　ICT を活用し、学習の記録を取ることで先月の学習状況を比較し、モチベーションを上げる生徒がいた。

4 今後の取組

○ 1学年の生徒は、コミュニケーション能力が高い生徒が多く、グループ学習や探究活動にも積極的に取り組める。授業の中でも「みんなで何かをするのは楽しい」と思えるような取組を継続していきたい。

○ 今後も生徒の主体性を育む支援を継続したい。例えば、みんなで何かをすることについては教師が用意したものを 100%取り組ませるよりも、教員が用意したもの 50%、残りの 50%は生徒に任せる、また、生徒に任せる割合を徐々に増やしていくなどの工夫をしていきたい。

○ 活動後のレポートを教室や廊下に掲示するなどの取組を継続して、生徒同士がお互いを知り、承認できる機会を充実させていきたい。

10

令和5年度「学業指導応援チーム派遣事業」の実施校における取組
栃木県立益子特別支援学校　高等部

異学年交流活動により生徒の主体性が育まれた取組

1　取組のポイント

生徒が自らをかけがえのない存在として認識し、自尊感情や自己有用感を高めることができるよう、学級及び異年齢交流活動での関わりを意識した取組を実施した。

（1）生徒の現状等

○ おとなしい生徒が多く、また、自己有用感が低い生徒も見られる
○ 学校になじめず、欠席・遅刻・早退の多い生徒が数人いる

（2）期待する生徒の姿

○ 心身の健康管理に努め、休まず元気に登校する生徒
○ 友達を思いやり、協力する生徒
○ 自分に自信を持ち、自分の考えや思いを表現する生徒

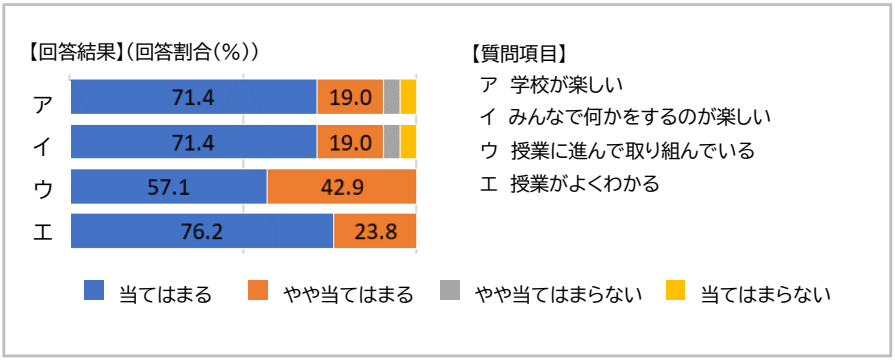
（3）　主な取組

○ 異年齢交流活動

2　PDCA サイクルで進めた取組

PDCA サイクル
P　D　C　A/P　D　C　A/P　D　C　A/P　D

P（計画）5月　**生徒の意識の把握（アンケート調査の実施）**



■ **学部会議（高等部課程1（1学年～3学年）の先生が出席）で、生徒の姿や今後の取組について話し合った。**

○ 予想以上に自己肯定感が高い生徒は多いかもしれない。
○ 「ア　学校が楽しい」に注目する。「当てはまる」と「やや当てはまる」を合わせて、ほぼ 100%にしたい。
○ 学校行事では普段リーダーの後ろで隠れている生徒も活躍する場面があった。
○ 多くの生徒に成功体験を積ませたい。

課題・目標を設定

○ 異年齢交流活動を通じて、高等部生がリーダー的役割を果たすことで自己有用感を高めたい。
○ 自分の考えや思いを表現する力を身につけさせたい。
○ 生徒が「教える」活動を通して、「できる」自信を持たせたい。

具体的な取組を検討

○ 異年齢交流活動

- 高等部生による小学部生への清掃レクチャー(一人一役を与える、見通しを持たせるための事前準備)
- 運動会がんばろう集会(リーダーとして説明、小学生と旗づくり)
- 農業体験(リハーサルの実施、小学生に収穫の仕方を教える) など

【それぞれの活動における働きかけ】
○ 台詞をあらかじめ用意したり、言い方の練習をしたりしてから実施する。
○ 下級生と関わる場面を意図的に設定する。
○ 1対1で関わる場面を設定する(他人任せにできないようにする)。
○ 離れたところで見守り、機会を見極めて支援するように先生は待機する。
○ デモンストレーションで高等部生の「かっこいい姿」を見せられる場をつくる。 など

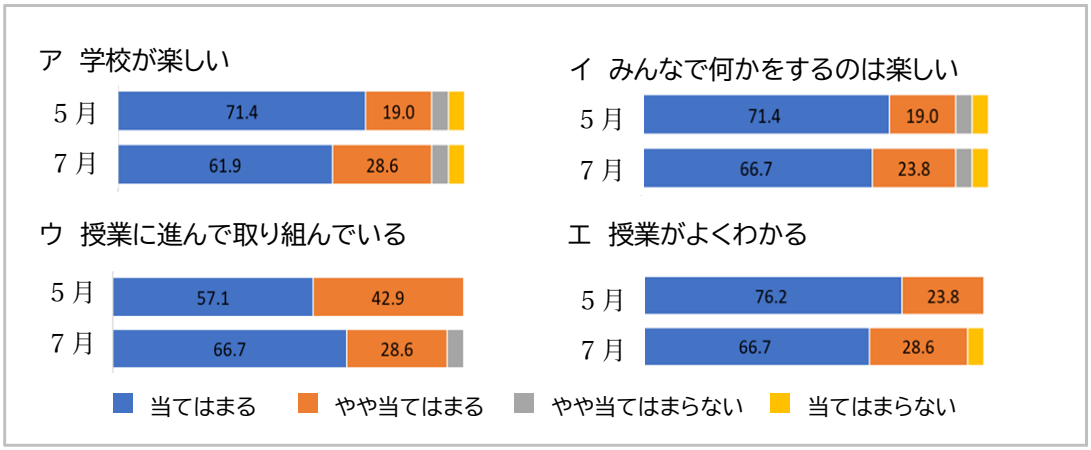
PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

D(実行) 5～7月 具体的な取組の実施

※ 清掃レクチャーは高等部2・3年と小学部6年で実施した。
※ 農業体験は高等部1年と小学部5年で実施した。

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

C(点検) 7月 アンケート調査の結果等の分析、取組の点検・見直し



■ 学部会議(高等部課程1(1学年～3学年)の先生が出席)で、取組の成果や生徒の状況等について話し合った。

○ 初めての学習内容に難しさを感じたため、「エ 授業がよくわかる」の「当てはまる」が減少したのではないか。
○ 清掃活動や農業体験に向けて、見通しを立てるための準備を入念に行ってきたことや、小学部生に一生懸命教えた経験が「ウ 授業に進んで取り組んでいる」の「当てはまる」の増加につながったと考えられる。
○ アンケートの自由記述「2学期楽しみなこと」について、「ましこ祭」と記述した生徒が多い。
○ 生徒が記入した振り返りシートやアンケートの記述では、生徒の自己有用感が高まっていると評価できる感想が見られる。

取組の点検・見直し

○ 「個への働きかけ」から「集団への働きかけ」を意識する。
○ 子どもたちが楽しみにしている「ましこ祭」に向けて、小学部生との交流機会を増やす。
○ 昼休み等の時間を利用して、高等部生と小学部生が一緒に遊んだり、高等部生が小学部生に絵本の読み聞かせをしたりするなどの事前交流の機会を設定する。
○ 子どもたち同士で声を掛け合える場面を設定する。

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

A/P(修正/計画) 7月　目標や取組の修正、方向性の共有

○ **異年齢交流活動の充実**
- 昼休み交流の実施(高等部生が小学部生と交流できる機会を設定する)
- ましこ祭(オープニング・フィナーレの運営)
- 朝の挨拶運動(週1回、朝の15分間児童生徒会役員2名が挨拶する)　　など

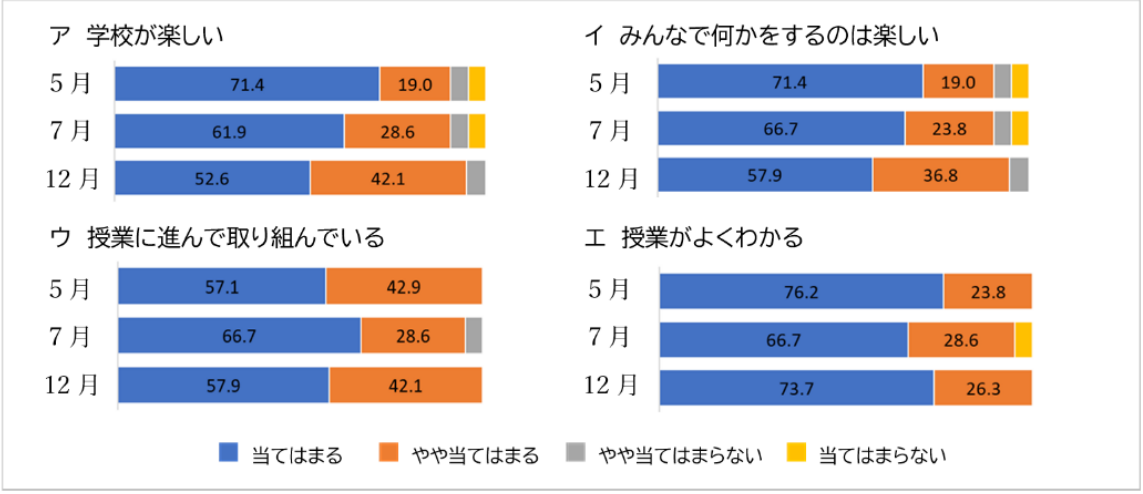
PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

D(実行) 7月～12月　具体的な取組の実施

※ 昼休み交流は、2週間で合計6回、2～3名一組の高等部生が小学部5・6年のクラスに訪問して一緒に遊んだ。
※ ましこ祭がんばろう集会やましこ祭オープニング、フィナーレにおける役割を務めた。

PDCA サイクル
P D C A/P D C A/P D C A/P D

C(点検) 12月　アンケート調査の結果等の分析、取組の点検・見直し



■ **学部会議(高等部課程1(1学年～3学年)の先生が出席)で、取組の成果や生徒の状況等について話し合った。**

【アンケート調査結果の分析】

○ 「ア 学校が楽しい」、「イ みんなで何かをするのは楽しい」は、高等部生がこれまで以上に何かに挑戦してみた結果、その難しさを感じたことで、「当てはまる」よりも「やや当てはまる」が増えたのではないか。
○ 挑戦する経験を積むことで、高等部生に主体性が育まれ、「エ 授業がよくわかる」の「当てはまる」が増えたと考えられる。

【生徒の取組状況等について】

○ 昼休み交流を通じて、「自分はこういうことができるんだ」ということに気付かされ、自信がついた生徒もいた。さらに小学部生への何気ない声かけや手加減ができるようになっていた。

○ 昼休み交流に笑顔で向かい、笑顔で帰ってくる姿が見られた。交流のために早めに準備する生徒がいた。

○ 校内の廊下で、小学部生から、一緒に活動したことのある高等部生に手をふる様子も見られるなど、コミュニケーションの幅が広がっていた。

○ 生徒会の生徒は司会に挑戦し、最初は緊張から声が小さかったが、自分の話す声が相手に聞こえないことを気付き、次は声のボリュームを上げて話せていた。

PDCA サイクル

P D C A/P D C A/P D C A/P D

A/P（修正・計画） D（実行） C（点検） A/P（修正・計画） D（実行）・・・ サイクルの継続・・・

3 成果

（1） 生徒について

○ 他学部との関わりの中で教室では見られない姿が見られた。ストレスに思うことなく活動の幅が広がった。

○ 回を重ねることに自分からの声掛けや動き、相手への気遣いができるようになった。

○ 緊張や戸惑いは見られたが、自分も楽しむ、お互いに楽しむという様子が見られた。

○ どう伝えたら相手（小学部生）に伝わるかをそれぞれ考えながら行動し、伝わった充実感を味わえた生徒が多かった。

○ 教えることで自分の授業への取組を振り返り、反省点をこれからの授業に生かそうと考える生徒もいた。

○ 小学部生の反応を見て、「この次は…」など級友と話し合う機会ができたり、次回への期待や自分の関わりを考えたりすることができた。

○ 普段関わりの少ない小学部生から「ありがとう」、「また遊んでね」などの言葉を伝えられたことで、苦手と感じていたことにうれしいと感じることができたようであった。

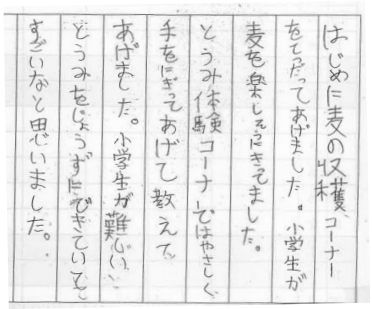
（2） 先生方の意識・関わりについて

○ 「教員からの言葉をあえて控えるようにしてみた」というかかわり方の実践が多かった。「失敗しないように先回りして指示を出しすぎていた」と気付く教員もいた。

○ 不安な生徒でも少し様子を見て、きっかけを作ることで動けることが多かった。自信がついたのか、普段消極的な生徒が実習中一人で動く姿があるなどの驚きもあった。

○ スタートラインに立つまでの準備や気持ちを作ってから活動に取組むように促したことで、「やってみよう」という気持ちをもてた生徒もいた。

【児童生徒の活動の様子と感想】

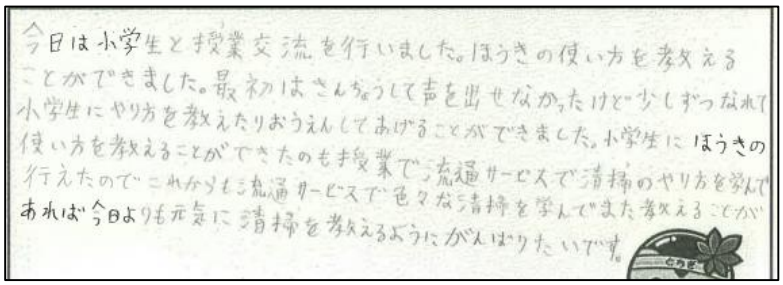

はじめに麦の収穫コーナーをてつだってあげました。小学生が麦を楽しそうにきそました。
とうみ体験コーナーではやさしく手をにぎってあげて教えてあげました。小学生が難しいとうみをじょうずにできていてすごいなと思いました。

農業体験

事前に小学生に伝わるようにみんなで考えて原稿や看板を作りました。やさしく教え、できたらほめようと伝え、当日はほぼ見守るのみとしました。手添えをしたり、ほめたことに笑顔が返ってきたり、楽しく活動できたようです。

清掃授業交流

生徒たちが戸惑いながらもどう接すればうまく教えられるか、考えながら動こうとする部分も見られました。「自分が話したことが伝わってうれしかった」と話す生徒も多くいました。


今日は小学生と授業交流を行いました。ほうきの使い方を教えることができました。最初はさんちょうして声を出せなかったけど少しずつなれて小学生にやり方を教えたりおうえんしてあげることができました。小学生にほうきの使い方を教えることができたのも授業で流通サービスで清掃のやり方を学んで行えたのでこれからも流通サービスで色々な清掃を学んでまた教えることがあれば今日よりも元気に清掃を教えるようにがんばりたいです。

昼休み交流

数人でのサッカーパス回しに、だんだん集まってきて…。「そっちにいくよ！」など声を掛け合いながら交流しました。

4　今後の取組

○　小学生から高校生まで在籍する環境を最大限に生かして意識的に指導をおこなった結果、周りを見よう、考えよう、できることをやってみようという高等部生の姿、その姿を見るための教員の意識化された支援の様子が見られた。この指導を継続するために、意識する場や枠を設定する。

（1）　意識的な児童生徒会活動
- 場を共有するだけに留まらず、高校生や役員児童生徒の活躍の場を作る
- 指示するのではなく、一緒に活動を考えたり、関わりの様子を見守ったりする姿勢の共有

（2）昼休み交流
- 頼られながらともに楽しんで活動する姿、考えて行動することを支援

（3）（発展的取組として）各ホームルームでの学習
- 自分を中心とした思考から他者（学級のみんな、学校のみんな、社会生活で関わるみんな）も含んだ思考へ